suite, sweet dreams

切香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｓｕｉｔｅ，ｓｗｅｅｔ ｄｒｅａｍｓ

【Ｎコード】
Ｎ７３８４Ｅ

【作者名】
切香

【あらすじ】
「現実にはユメを。ユメには花束を」これが、ふたりのキャッチフレーズ。辛い現実を生きるヒトにユメを売り歩く、空子と切香の出会った客は・・・？切ない恋愛模様とＢＬＥＡＣＨキャラを織り交ぜた、非日常物語。※日番谷×雛森、乱菊×ギンで恋愛色があります。オリジナル色が強いので、苦手な方は閲覧をご遠慮ください。

― prologue ―

「現実にはユメを。ユメには花束を」
現実が辛くて、ユメに癒しを求めるヒトたち。
そんなヒトがいる限り、あたしたちは存在し続ける。

伽藍(ガラン)
伽藍(ガラン)

ここは・・・どこ？
鉦(かね)が鳴る音が聞こえる。

澄んだ空気が、頬を緩やかに撫でてゆく。
暖かな日差しが、あたしの短い髪を揺らしてゆく。

あぁ・・・これは、誰かのユメだ。
あたしは、スッと目をあけた。

空も山も鳥も草も水も人も心も、
芯まで染め通るような、圧倒的な夕焼けの朱(あか)。
あたしは息を飲む。

これは、誰のユメだろう。
圧倒的で、美しくて・・・そして、訪れるヒトの心を、寂しくさせる。

きしきし。
音を立てて、誰もいない廊下を歩く。
鉦の音が聞こえるのに。人の声が聞こえるのに。
誰も人の気配がしない。

だれも、いないの・・・？
そんなハズない。このユメを見ている本人が、どこかにいるはずなのに。
これじゃ、まるで伽藍堂(がらんどう)だ。

夕焼けの太陽にあたためられ、人肌のような温度の柱に手をやり、
あたしは庭を眺めやった。
整えられた枯山水。白くて丸い石の上に、さざなみのように夕日が広がる。

「誰」
あたしは、庭の向こうにしつらえられた、鉦を見やった。
ヒトが隠れられそうに、巨大な鉦の影に、誰かの影を見たから。
鉦がしつらえられた、小さな庵の柱に背中をもたせかけている。
大人の、男のヒトだ。

痩せすぎ、というわけじゃないけど。
着物から覗く鎖骨が、やけに目だって見える。
長めの手足を、無造作に床に投げ出している。
あたしが歩いてくる足音は分かるはずなのに、顔は背けられ、
庵の向こうの遠い景色に、視線を投じていた。

伽藍。
がやがや。
鉦の音が聞こえるのに。ヒトの声が聞こえるのに。
その人の周りは、森閑(しんかん)と静まり返っている。
ヒトのぬくもりは、そこにはない。

悲しいんだね。
寂しいんだね。
その姿は、誰も否定していないようで居て、誰も傍に寄せつけない。

――　お前は誰だ
思念が、直接頭に届く。
あたしは名を名乗った。
あたしの名は切香(キリカ)。
ユメに逃げ込みたいほどに、辛い現実をもつヒトに。
そのヒトが望むユメを見せる。
それがあたしの仕事なの。

ひどい仕事だ、とそのヒトは言った。
ヒトの不幸を食い物にするなんて。
薄い唇。口角を上げるしぐさは、普通は「微笑(ホホエミ)」と言うんだろうけど。
ただ口の端にシワを寄せただけに見えた。

「アナタだって、ユメに逃げ込んでる一人でしょ？
あたしたちを求めるヒト以外には、あたしの姿は見えないし、声も届かないもの」
鉦のそばまで歩み寄り、あたしは鉦にそっと手をやった。
夕日にあたためられたぬくもりがそこにもある。

でも・・・この鉦はきっと、鳴ることはない。そんな気がした。

――　覗きこむな、俺の心を
そのヒトは、あたしが近づくとそう言った。
覗き込んでもムダだって。
何もないから。
この風景と同じように、俺の心は伽藍堂だから、と。

「そうかな」
アタシはそう言ったけど、もう何も言わずに、黙り込んだ。
そうは・・・思えないけど。

ユメ、か。
あたしがひとつ、アクビをするくらいの間をあけて、彼は言った。
ギフトサービスはしてるのか？って。

「してるけど・・・ユメをあげたいヒトがいるの？」
一人ほど。

「ふぅん。まぁいいよ。人数分のお金さえくれればいいから。
お金はどうやって払うかって？今、財布出して払ってくれればいいの。
このユメから覚めたら、財布見てみなよ。ちゃんとお金、減ってるから」
ポン、とそのヒトがまるごと財布を投げてきたから、あたしはびっくりした。
「いいの？そんなに」
いいのいいの。そんな感じで、彼はヒラヒラと手を振る。

――　そろそろ、このユメから覚めないと
そのヒトの思念が、あたしの頭の中で囁(ささや)く。
その姿が、ふっ、と消えそうにかすんだ。
同時に、まわりの夕焼けがどんどんぼやけて、ただの朱色の光になってゆく。

ユメが、覚める・・・

「ねぇ、誰にあげたいの？ユメ」
それを聞かなきゃ、あたしは仕事ができない。
今にも消えようとしているそのヒトは、ふっと微笑んで、その名前を口にした。
「分かった。そのヒトでいいのね」
あたしの問いに、そのヒトは微笑んだ。
その薄い口元が、初めて言葉をつむいだ。
「頼むで」
なんだ。
微笑めるんじゃない。

どうか、ホッとするようなユメをひとつ、頼むよ。
そのヒトは、最後にそう言った。
ｓｕｉｔｅ，　ｓｗｅｅｔ　ｄｒｅａｍｓ・・・　ひとつなぎの、やさしいユメを。

――――――――
おせっかいな補足。

作者と同じ名前が出てますが、「有りそうで無い、奇妙な名前」が他に思いつかなかったためです。特に作者との関連はない・・・のは当然か。

夢の通ひ路（一）

「ごめんね、日番谷くん。迷惑かけちゃって」
雛森は、消え入りそうな声で、そう呟いた。
雛森の口元の空気が、ほぅ、と白く染まった。
もう、冬だな。
それを見て、日番谷はそんなことを思った。

「迷惑じゃねーよ」
木盥（きだらい）に入れた水に、白い手ぬぐいを浸した。
ぎゅっと絞ると、雛森の前髪を手で避けて、その額に置いた。
「つめた！」
「我慢しろ」
布団を首元まで押し上げてやる。
眉間の皺（しわ）がほどけてゆく。ホッとした表情になるのを見て、日番谷も胸をなでおろした。

パチッ、と音を立てて、囲炉裏（いろり）の炎が弾けた。
部屋の隅に置かれた行灯（あんどん）が、ジジ・・・と音を立てる以外は、辺りは静まり返っている。
炎が揺れる影が、障子に大きく投影されている。
ささやかな燈。ささやかな音。
冴え冴えとした空気の中で、雛森の頬は赤い。
かすかに、荒い息遣いも聞こえてくる。
熱が高いのだ。

「ひとりで隊をまとめるなんて、ムリに決まってんだろ。もっと仲間を頼れよ」
日番谷の声に、雛森は力なく笑った。

「うぅん。藍染隊長が戻ってきたときに、怒られちゃうもの」
パチッ、と音を立て、炭火が爆ぜた。
「・・・そうだな」
それは、これまで何十回と繰り返された、儀式のような会話だった。
藍染隊長が戻ってきたら。
そんなことが、あるはずがないことを、日番谷は判っている。
それでも、それを雛森に告げることはない。

藍染に心も体もボロボロにされて尚、雛森の中心には藍染がいる。
藍染に取って代わることもできない俺が、藍染を否定することは・・・
雛森の生そのものを、否定することになるからだ。

俺も、まだまだガキだってことか。
日番谷はそう思う。
他人にそれを言われたら、絶対にそいつに言い返すだろうけど。
日番谷には、結局判らないのだ。
雛森の心の中心に、藍染の名を名乗り、居座っているものの正体が。

気づけば、ぼぅっとしていたらしい。
雛森が、スッと手を伸ばして来たのに、気づかなかった。
斬魂刀を握れるとは思えない、白く華奢(きゃしゃ)な指が、日番谷の頬に、かすかに触れた。
「ごめんね、心配かけて」
大きな黒い瞳が、日番谷をまっすぐに映しているのが、見えた。
その瞳は、姉のように優しい。
まるで、看病している日番谷が、見守られているような気分になるほどに。

「溜まってる書類、それか？」

日番谷はスッと視線を逸らすと、体をひねって後ろを向いた。
きちんと整えられた机の上には、右側には硯と筆が、左側には書類の束が置かれていた。
日番谷は束を手に取ると、パラパラと何枚かめくった。
「やっとくぞ」
「え、でも・・・」
「どうせここにいる間、やることねーんだよ」

やることがない、なんてありえない。
雛森は、早くも書類に没頭しだした、日番谷の横顔を見る。
数ヶ月前・・・旅禍の一件まで、日番谷の姿を精霊廷で見ることは、滅多になかった。
精霊廷のお高くとまった空気の中にいると、ウンザリすんだよ。
前に理由を聞いたとき、生意気な口調で、そんなことを言っていたから、たしなめたものだ。
副官の松本乱菊でさえ連絡に困るほど、ソウル・ソサエティの担当エリアを飛び回っていたのだ。

でも・・・旅禍の一件を境に、日番谷の行動はがらりと変わった。
精霊廷内のあらゆる仕事を引き受け、精霊廷から一歩も出なくなったのだ。
ソウル・ソサエティを護る。死神になった時点での誓いだけではなく。
隊長として、反乱の傷跡に苦しむ仲間の支えになると、決意したかのように。

「・・・日番谷くん」
「あ？」
「日番谷くん」
「なんだよ」

ぶっきらぼうながらも、必ず返事を返してくれる距離に、日番谷がいる。
「日番谷くんが、いてくれてよかったよ」
ひょい、と日番谷が振り返った。
「・・・」
しかし、日番谷の視線の主は、穏やかな寝息と共に、瞳を閉じていた。
「・・・ンだよ」
雛森の前では決して見せない、拗ねた一言とため息を、一緒くたに吐き出す。

日番谷に見られているとは夢にも思っていない無心な表情で、雛森は眠り続けた。
時計の針の音をひとつひとつ数えるような、切ない時間が流れてゆく。
硯に置いた筆は、とっくに乾いていた。
「あ・・・」
雛森の口元から、吐息のような声が漏れた。
片膝を立て、後ろに手を付いて雛森を見下ろしていた日番谷が、ハッ、と我に返る。
スッ、と雛森の頬に弧を描くように、一筋の涙が流れ落ちた。
「藍染・・・隊長」
日番谷の睫が、かすかに震えた。
無意識に雛森の頬に伸ばした指先が、寸前で握り締められる。
ため息とともに、ゆっくりと、瞼を閉じた。
視界が、闇に落ちてゆく。

夢の通ひ路（二）

すぅ、と吉良は瞳を開けた。
雛森は眠ってしまったのだろう、部屋の中からは、全く何の音もしてこなかった。
障子の向こうからは、燈の揺れる様がぼんやりと、うかがえる。
その指は、さっきからずっと、障子にかけられている。
でも吉良にはどうしても、それを引き開けることができないのだった。

吉良は、自分の手のひらを見つめる。
激情に駆られ雛森と刃を交わした時、刀を握り締めた、手のひらを。
あれから吉良は、雛森とどう目を合わせ、何を話したらいいのか、分からないのだ。

手には、雛森が気に入っている甘味処の、葛切（くずきり）が入った紙袋がある。
真央霊術院の同級だった頃、なけなしの小遣いを持って、よく買いに行ったものだ。
流魂街出身の雛森と恋次の前では、貴族である自分が金がないなど、思われたくなくて。
いつも、半ば無理やりにおごっていたことを思い出す。
今思えば、それは無意味な・・・雛森には全く届かない、意地にすぎない。
でもそれだけでも、吉良は満足だったのだ。
あの頃は、こんな未来が待っているとは、夢にも思いはしなかった。
吉良は、そっと葛切の入った袋を障子の脇に置き、そのままその場を後にした。

「吉良副隊長！雛森副隊長のご様子は・・・？」
五番隊舎の、隊士の居住空間に足を踏み入れた途端、吉良は多くの隊士に取り囲まれた。
本当に雛森は皆から愛されている、と思う。
自分とは・・・大違いだ。
「心配いらないよ。日番谷隊長がいてくれるから」
吉良がどんな思いでその名を口にしたにしろ、皆はいたく安心したようだった。
「そうか。日番谷隊長がいてくださるなら、安心だな」
「雛森副隊長も、ゆっくりできるだろう」
そんな言葉をあいまいに聞き流し、吉良は隊舎を後にした。

――　僕だって、毎日雛森君を見てた。
表立ってじっと見るのは躊躇(ためら)われたけど、ずっと気にかけていた。
同じように隊長を失った隊の副隊長同士だったから？
学友だったから？
それは事実だ。でも、真実を語ってはいない。

今日だって、吉良は五番隊の垣根の向こうから、ちらり、と雛森の姿を見た。
いつも通り、てきぱきと隊を指揮していた。
隊長不在の隊を、あそこまで見事に切り盛りするなど、雛森だからこそだろう。
吉良の目にも雛森は、立ち直ったように見えた。

五番隊舎に背を向けた、その時。
「あれ？日番谷くん？どーしたの」
素っ頓狂な雛森の声に、吉良は振り返った。
視界に、日番谷がひょいと垣根を飛び越え、五番隊の修練場に入るのが見えた。

「お・・・お疲れ様です、日番谷隊長！」
いきなり登場した他隊の隊長に、五番隊士たちが慌てて頭を下げる。
「ちょっと来い、雛森！」
挨拶もそこそこに、日番谷は乱暴に雛森の袖を掴み、どんどん歩いてゆく。
隊士からは見えない、修練場からは陰になった場所だ。
自分のほうに向かってくる、そう思った吉良はとっさに気配を消した。

「ちょっと、どうしたのよ、シロちゃん」
「シロちゃんって言うな」
「いいじゃない、二人きりなんだから」
あぁもぅ、と日番谷が面倒くさそうに頭を掻くのが、垣根の隙間から見えた。
そして有無を言わさず、雛森の額に手のひらを乗せる。
「すごい冷たい手よ？」
「阿呆。お前が熱いんだ」
「そう？」
ぎくり、とした。
垣根に遮られた中途半端な視界で、ふたりの顔が触れるほどに近づいたように見えたからだ。
「ほんと。全然熱さがちがうね」
コツン、と無造作に額を合わせた雛森が、大儀そうに身を起こす。
「ホント、じゃねーって。お前は昔っから、疲れるとすぐ熱出すんだ。
そろそろじゃねーかと思ってたんだよ」
腕を組んだ日番谷が、雛森に説教している。
吉良は、雛森から目を逸らせずにいた。
これほど無防備に、雛森が笑う表情を、初めて見たからだ。
何十年も、一緒にいて。一度も見せてくれなかった表情で、雛森が

微笑む。
「日番谷くんが言うなら、ちょっと休もうかなぁ」
熱のせいで、上気した表情で照れたように笑う雛森の瞳が、一瞬垣根に注がれた気がして。
吉良は、まるで二人の情事を盗み見たかのように、赤面した。

冴え冴えとした月光が、冬の道を照らしている。
どれほど明るくても、決して温度を持たないその光が、今はありがたかった。
自分の心を冷やして欲しい。
そんな気持ちだった。
「日番谷隊長。・・・貴方は、強すぎますよ」

藍染に陥れられた雛森が日番谷に刀を向けた時、吉良もその場にいた。
最も大切な人間に裏切られて尚、日番谷は我を忘れたりはせず、雛森を説得しようとしていた。
雛森だけは傷つけないという市丸の甘言に乗り、結果的に瀕死の重傷を負わせる原因を作った、自分とは大違いだ。

――「責める気はない」
反乱直後、謝罪のために訪れた吉良に対して、日番谷が言った言葉は、それだった。
斬られてもしかたない、と覚悟を決めていったのに、だ。
――「なぜです。貴方はどうして、そんなに・・・赦(ゆる)せるんですか」
吉良の潤んだ瞳に返したのは、あくまで静謐(せいひつ)な翡翠の瞳。
吉良は日番谷に会って初めて、翡翠(ヒスイ)とは決して揺らがない、強い色

なのだと知った。

――「もう誰にも、どうすることもできないからだよ」

外見に似合わぬ大人びた口調で、日番谷はそう返した。

そう。

一度起こった事実が覆らない以上、もう、どうにもならないのだ。

そんなことは判っている。

判った上で、それでもあがいてしまうから苦しいのだ。

未だに、誰のことも心から赦せないし、赦してもらえるとも思えないのだ。

――シロちゃん。

刃を交わした過去があって尚、無邪気に日番谷に笑いかけた、雛森の表情を思い出す。

「日番谷隊長」

吉良は、雲ひとつない夜空を見上げた。

一分の隙もない銀白色の氷輪は、日番谷の気配を彷彿(ほうふつ)とさせる。

「どうか・・・その役を、僕にください」

兄のように、弟のように、見守り続けるその役を。

無防備な笑みを与えられる、その役を。

市丸が去って後、自分の中に真実を探し続けた吉良の、それだけが確かな願いに思えた。

夢の通ひ路（三）

しん、と静まり返った廊下は、凍るように冷たかった。
燈(あかり)の付いていない自分の部屋の前に戻ってきて、吉良はふと、隣の部屋を見やった。
そこは、市丸が使っていた私室だ。
「え・・」
障子が、開け放たれている。長い影が、部屋の中から廊下まで伸びていた。

――　まさか。
ダッ、と走り寄り、障子に手をかける。
その音に振り返った立ち姿を見て、吉良はその場に立ち竦んだ。
「ま、松本さん？どうしてここに」
「ひどい慌てようね。ギンが戻ってきたとか思ったの？」
からかうような口調と同時に、碧い瞳が吉良に向けられた。
そんな訳ないじゃない、と軽い口調のまま言って、屈託なく笑う。
「あ・・・いや」
一瞬・・・乱菊の背中に、濃い孤独の影が張り付いていた気がしたが・・・気のせいだったか。

俯いた吉良の肩を、軽快に歩み寄ってきた乱菊の手がポンと打った。
「しっかりしなさいよ。ギンがいない今、あんたが三番隊の支えなんだから」
そう。それを思えば、立ち止まっている時間など、ないはずなのだ。
雛森のように、強くならなければいけない。
そこまで考えて・・・吉良は思考を頭から振り払った。
「松本さんこそ、一体どうしてこんな所に？」
そう問いかけると、改めて部屋の中を見渡した。

そこは、見事なくらい何もない空間だった。
市丸が虚圏(ウェコムンド)へ去った後、市丸の私物は全て処分されたから、当然のことだが。
処分される前、廊下に出された私物を見て、吉良は半ば唖然としたものだ。
あの部屋にいたのは決して短い時間ではないのに、私物は驚くほど少なかった。
「なーんもない部屋よね。前も今も」
吉良の思っていたことを読んだのか、乱菊は部屋をぐるりと見渡した。
「立つ鳥、跡を濁さず、か。狐もそうだとは思わなかったわ」
うーん、と背伸びをしてみせる。

問いかけるような吉良の瞳に、さきほど問われた内容を思い出したようだった。
「いや、大したことじゃないんだけど。お香立てと、お香を貸してたのよ」
「お・・・お香立て？」
市丸にそんな趣味があったとは、吉良の耳にも初耳だった。
「えぇ。あたしが使ってた香りを、ギンが気に入ってね。貸してくれって言われたの」
吉良の知らない市丸の姿だった。
何かに執着する、どころか、気に入るという感情すら滅多に見せないと思っていたのに。
まるで知らない人間の話を聞くように、違和感があった。

「もしかしたら残ってるかと思ったけど、ここまでスッカラカンとはね。

いなくなるんだったら、その前に返して欲しいわよ！気に入ってたのに」
まるで、市丸がいなくなったことよりも大事だ、とでも言うように、乱菊が嘆息する。
思わず、といった素振りで、吉良が噴出した。
「なーによ」
「いや、強いですね。あなたも」

あれほどのことがあったのに。
なぜ、この人たちは、暗い影を引きずらないのだろう。
転んでも、さっさと立ち上がり、またスタスタと歩き出せるタイプだと思う。
転んだら、転んだ原因を鬱々と考えて立ち上がれない、自分とは正反対だと思った。

「ギンがいなくなって、そんなにショック？
はっきり言って、あんた苦労ばっかりしてたじゃない」
率直な言い方に、吉良の表情が苦笑に変わる。
「確かに、模範的な隊長じゃありませんでしたけどね。
大体、副官の僕の名前を覚えるのさえ、随分かかりましたら」
イヅル。
初めて名前で呼ばれるまで、どれくらいの時間を要しただろう。
思い出せない。
思い出そうとすると、現実が胸に突き刺さる気がするから。

吉良の顔に、乱菊の視線がぶつかる。
しっかりしなさいよ。そう軽く言い放たれるのではないかと思っていた。
しかし、見返した吉良の前には、思いがけなく優しい乱菊のまなざ

しがあった。
「忘れろなんて、言わないわよ。あんた、そんな器用なタイプじゃないでしょ？
吹っ切れるまで悩んでもいいのよ。時がきっと、解決してくれるから」
後になって、吉良は思うことになる。
なぜ、あの時の乱菊は、自分の思いを掬い取ったかのように、的確に言い当てたのだろうと。
「じゃぁね。お休み」
そう吉良の脇をすれ違った乱菊からは、市丸と同じ香りがした。

乱菊が十番隊隊舎に戻ったころ、時刻はもう9時を回っていた。
門をくぐりざまに、隊首室のほうをチラリと見やる。
「・・・燈がついてる」
各隊の就業時間は、基本は9時5時。仕事を始めて12時間も執務室にいるなんて・・・
乱菊には信じられないが、この隊長には別段そうでもないらしい。
――　放っておくわけにはいかないか。

いつもなら、そのまま通り過ぎて、私室に帰ってしまうのがほとんどだった。
――　突っ立ってるなら手伝え。手伝わねーなら帰れ。
可愛げというものが、残念なほど一切無い口調で、言い放たれるのが関の山だからだ。
いつもと変わらない日常。

でも・・・最近の日番谷は、少しだけ、どこか「ずれて」来ている。
具体的にどこがどうおかしい、とは断じられない。

特に不健康そうでも不機嫌そうでもないし、言動にもおかしなところはない。
でも何か、本来の日番谷とは、違う気がするのだ。

その時、冷たい風がヒュウッと廊下に吹き込み、乱菊は慌てて、十番隊舎に駆け込んだ。
――　お前寒がりなんやから、そんな胸元開けて死覇装着たらアカンって。アホやな。
風が吹き抜けると同時に、ギンの残していった言葉が、通り過ぎてゆく。
「・・・。なーに、よ」
文句を言ってみても、それに返す言葉はもちろん無い。

脳裏には、今にも倒れそうなくらいに青白い、イヅルの姿が浮かんでいた。
気丈に振舞いながらも、体調をついに崩したという雛森の姿も。
そういう、判りやすい辛さを出せる人は、幸せかもしれないと不意に思う。
中には、辛さを外に見せないどころか、自分でも気づかない者もいるのだ。
自分自身すら騙している心理を、外の人間が気づくのは、きわめて難しい。

「隊長、入りますよ？」
ノックしてみたが、返事が無い。中で寝入っているのかもしれない。
なるべく音を立てないように、スッ、と戸を開ける。
途端に、覚えのある香りが、鼻腔へと届いた。

「・・・ギン・・・？」

あたしは、何を言っているんだ。つぶやきながらも、そう思っていた。
市丸がこんなところにいるはずがない。
でも・・・この濃厚に漂う香りは間違いなく、自分が市丸に貸したものだ。
隊首机の前の椅子は、背もたれが乱菊のほうを向いていた。
ソファーにも、人の気配は無い。
「誰もいないの？」
乱菊が部屋を見渡しながら、足を踏み入れた、その時だった。

「ひとーり・・・ふたり。『やっぱり多い』」

唐突に聞こえてきた声に、乱菊はビクリと肩を震わせた。
「誰！」
乱菊の声に鋭さが増す。
考えられないことだった。
副隊長の自分が、これほど近くにいる気配を全く感じ取れないなんて。

「お客さんひとり、見つけた」
くるり、と隊首席の椅子が回った。

夢の通ひ路（四）

「アンタ・・・誰よ」
乱菊は、その場にたたずんだまま、もう一度、聞き返すのがやっとだった。
――　何？
なんともいえない奇妙な感覚が、胸を満たしてゆく。
――　何なの？
そもそも、なぜただの「子供」の気配に、今の今まで気づかなかった？

隊首席に座っていたのは、年のころ6歳から7歳くらいに見える、幼い少女だった。
日本人形のように、漆黒でまっすぐな長い髪、陶器のような白い肌。
そして、ハッとするほど蒼い、大きな瞳をしていた。
漆黒と翡翠。普通は見当たらない色合いが、少女の整った容貌を、美しいというより不思議に見せていた。

「空子（カラコ）」
少女の小さな唇が、言葉を形作る。
その不思議な発音が名前だと気づくのに、少し時間がかかった。
体重が無いかのように、ふわり、と空子と名乗った少女が立ち上がる。
瞳の色と同じ、深い青色のドレスの裾が揺れた。
足元に引きずるような長いドレスなのに、裾は埃ひとつ付いていない。

「ここは隊首室よ。どうしてこんなところにいるの？」
なるべく当たり前の言葉を選んで発する。

そうでもしないと、「巻き込まれる」。そう思ったからだ。
空子が発する、平衡感覚を奪ってゆくような・・・夢の中に落ち込むような空気に。

「お姉さんに会いに来たの。お姉さんは私の、『お客様』だから」
「客って、何よ？」
この状況で会話が成り立つのが不思議だが、乱菊は気づけばそう返していた。
空子は落ち着き払った態度のまま、コクンと頷く。
「そうよ。頼まれたの。お姉さんに、ユメを見せてあげるようにって」
「ゆ・・・夢？頼まれたって、誰によ？」
二人の言葉は噛み合っているようで、どこか奇妙にすれ違った。
何しろ、乱菊には、空子が何を言っているのか全く判らないのだ。

「依頼人については、言ってはいけないの」
空子は、小首をかしげて答えた。
考えてみれば、この少女に、この年齢の子供なら当然あるはずの、子供らしい表情は全くない。
無表情というわけではないが、喜怒哀楽が読み取れないのだ。

「ただ、私達はいっぱいお金をもらいすぎちゃったの。
お金の分はしっかり仕事をしないと、後の信用にも関わるし。
だから今回は特別に、とびきり傷ついてる人をもう一人連れて行ってあげる」
「連れて行くって、どこによ？」
「辛い現実に生きているヒトに、そのヒトが望むユメを見せてあげるのが、私達の仕事なの」
「もう一人連れて行くっていったわね？一体・・・」
「・・・ヒツガヤ、トウシロウ君っていうの？」

・・・え？

乱菊は問いかけるのを止め、空子を凝視した。
危うい一線に立っているのだといわれれば、確かに、彼以上にそれに似つかわしい人間はいないのかもしれない。
だが・・・副官の自分ですら微(かす)かにしか感じ取れない兆候を、「なぜ知っているのだ」？
「隊長には、何もしないで！」
突然感情を露(あらわ)にした乱菊に、
「残念ね」
空子は、抑揚の無い言葉を返した。
「もう行ってるわ。もうひとりが」
「えっ？」
隊首席に手をついた乱菊の体が、ぐらり、と揺れた。
――　連れて行かれる！
とっさにぐっと机の端を握り、意識を保とうとしたが・・・ぐんぐんと意識は遠のいてゆく。

「・・・隊、長・・」
その言葉を最後に、乱菊の体が床にくず折れた。
意識を完全に手放した乱菊の傍に、空子がスッと立ち、見下ろした。
「よいユメを」

「日番谷冬獅郎くん、だよね」
「誰だ？お前」
日番谷は筆を止めると、いつしかその部屋にたたずんでいた、その

少女を見やった。
奇妙な表現だが、「いつの間にか居た」という表現が正しい。
全く、その少女が部屋に現れた気配が、つかめなかったからだ。

年のころは、6歳か7歳程度。日番谷よりも少し幼い程度だ。
白い髪は短く、ふわふわと頭を覆っている。
深い翠色の瞳が、日番谷を見つめていた。
瞳の色に合わせたかのような、翠色の短いドレスを身にまとっている。

「君の分は、実は依頼に入ってないんだけど」
全く湿度というものが感じられない、サラリとした声で少女は言った。
「特別サービスだよ。とびきりのユメに連れて行ってあげる」
「は？ユメ？何言って・・・」
「あぁ、言い忘れてたけど。あたしの名前は切香（キリカ）。はじめまして」
「名前はどうだっていいんだ。お前が何者かって聞いてんだよ」
「あたしは『渡（ワタリ）』」
「・・・渡（ワタリ）？」

切香、と名乗った少女は、軽い足取りで日番谷の目の前に歩み寄った。
「あたしの見立て、間違ってなかったみたいね」
トン、と小さな指が、日番谷の額を突く。
「君が一番、現実に傷ついてるみたいだから」
日番谷は答えず、その小さな手を顔の前からどかせる。
「適当なこと言ってんじゃねえ」
わずかに細められた瞳が、切香に向けられる。
日番谷の不機嫌もどこ吹く風、切香は軽やかに笑うと、ステップを踏むようにその場でくるりと回った。

「おい騒ぐな、病人が寝て・・・」
言いながら雛森を見やった日番谷は、雛森が半身を布団から起こしているのに気づいた。
その瞳が、怯えたように揺れている。
「気にすんな、雛森。すぐに出て行かせるから」
「出て、行かせる？」
雛森の声が、かすかに震えた。
「シロちゃん・・・誰としゃべってるの？」
「・・・え？コイツだよ」
日番谷はあっけに取られ、切香を指差した。
しかし、雛森の視線は、頼りなくその周辺を彷徨った。
「誰も・・・いないよ？」
「は？」
日番谷は一瞬、沈黙する。そして、切香を見返した。

ふふっ、と口元が悪戯っぽい笑みに形作られる。
「おやすみ。いいユメを」
途端に、日番谷の意識がぐらり、と混濁する。
周りの景色がにじんで見える。
シロちゃん！
雛森の悲鳴を聞きながら、日番谷はその場に突っ伏した。

― watari ―

「おい、聞いたか？十番隊の話・・・」
「あぁ。十番隊だけは、何があっても安泰だと思ってたのに」
「一体どうしたんだ？最近、次々と隊長や、副隊長が・・・」
「シッ！」
金髪の死神が、足早に傍を通り過ぎるのを見て、噂話がぴた、と止んだ。

吉良は自分の周りで漣のように繰り返される不吉な会話を無視し、四番隊隊舎に足を踏み入れた。
「吉良副隊長、こちらです！」
四番隊副隊長、虎徹勇音が、入り口で彼を見て頭を下げた。
その暗い表情を見て、吉良は改めて思い知らされる。
これが、紛れも無い「現実」なのだと。

――　どうしてなんだ？
虎徹に案内されながら、目が痛くなるほど白い、階段を上ってゆく。
脳裏には、つい三日前の雛森と日番谷の会話が、まだ生々しく残っている。
乱菊が、ひとり市丸のいない部屋にたたずんでいた、その後姿も。
それなのに・・・

「吉良くん！」
吉良が足を踏み入れた途端、雛森が泣きそうな顔で振り返った。
いつもの吉良なら、まともに雛森を見返すことなど出来なかっただろう。
だが皮肉なことに、今はそれどころではなかった。

「雛森君！日番谷隊長と、松本副隊長のご容態は・・・」
「・・・眠り続けていますよ。相変わらず、目覚める兆しはありません」
吉良の言葉に返したのは、病室の奥に控えていた、卯ノ花だった。

改めて、吉良は広い病室の中を見渡す。
卯ノ花、浮竹、京楽、白哉、涅。そして、雛森、檜佐木、恋次。
この８名が、病室の窓際に置かれた二つのベッドの周りに、集まっていた。
そして、その真っ白い布団の下で昏々と眠り続けているのは、日番谷と乱菊の二人。

「なに、やってるんですか。お二人とも・・・」
吉良が歩み寄ると、傍にいた者たちが、暗い影を表情に貼り付けたまま、下がった。
「起きてくださいよ！三日も目覚めないなんて、何の冗談ですか！」
吉良がどれほど大声で叫んでも、同じだった。
軽く閉じられたふたりの瞳が、開かれることはなかった。

「やめろよ吉良。誰がどんなに声かけても、ゆすってもダメなんだ」
後ろから歩み寄ってきた恋次が、吉良の肩をグッと掴んで引き戻した。
「卯ノ花隊長！・・・これはどういう病気なのですか？
どうしたら二人は目覚めるんですか？」
吉良の問いに、卯ノ花はしばらく黙考したまま、微動だにしなかった。
吉良がじれったくなった頃、卯ノ花はゆっくりと雛森を見やる。

「・・・雛森さん。あなたにお伺いしたいことがあります」
「は、はい！」
雛森は涙を拭き、緊張した面持ちで卯ノ花を見返した。
「日番谷隊長は、昏倒される直前、誰かと話していたといいましたね？
でも、あなたには何も見えなかった」
「ええ。危険な相手と話している風じゃなくて、どこか困ったみたいな・・・
『夢？』とか、『ワタリ』とか、『適当なことを言うな』とか。
相手の言うことを聞き返してるみたいでした」

「ワタリ・・・渡、のことかい。興味深いネ」
意外にも、雛森に返したのは涅だった。
「何のことか、ご存知なんですか？涅隊長！」
いつもなら涅とは出来る限り目もあわせない雛森だが、必死の表情で涅に歩み寄る。
「ご存知に決まっているサ、私に知らないことなどない」
涅は、その目をぎょろりと周囲に走らせてから、落ち着き払って言葉を続けた。

「望む者に、望む夢を見せるのを生業（なりわい）とする者達の総称だヨ。
渡は自由に夢を渡り、『客』となりうる人物以外にはその姿を見ることはできないという。
今の話と合致するネ」
「夢を見せる？一体何のために」
「奴らの考えることなど、想像もつかんネ。そもそも興味がない」
涅は再び、肩をすくめて京楽の問いに答えた。

「我々死神とは何の接点も無い。『渡（ワタリ）』が何者なのかも誰も知らない。

ただ、そう言った輪廻から外れたものは、確実に存在するのだヨ。
非科学的・・・現世で例えれば、妖怪や精霊のようなものだヨ」
死神たちは、言葉を失ったかのように、しばし押し黙ることしかできなかった。

「どうして、日番谷くんと乱菊さんだけが、こんなことに・・・」
しばらくして沈黙を破ったのは、雛森の涙声だった。
「一体、どうしたら目を覚ますんですか？」
その悲痛な声音に、その場にいたほとんど全員が、視線を伏せた。

「夢から戻ってくる者もいるし、そのまま眠り続けた者もいる。
ただ、目覚めた者は、その夢のことは全く覚えていない。
そのため、何が目覚める『鍵』なのかは、この私でも分からんネ」
「・・・そんな」
雛森は、くず折れるように、日番谷のベッド脇に膝を付いた。

――　日番谷隊長・・・
ポツリ、ポツリ、と枕元が涙で濡れるのを見て、吉良は心中、日番谷に呼びかけた。
――　貴方の大切な人が泣いていますよ。なにも、しないんですか・・・
軽く閉じられた瞼の奥の強い翡翠が、見えない。
とてつもなく厚い壁に隔てられているように、日番谷は睫すら動かさなかった。

「私も、『渡』の話は、耳にしたことがあります」
卯ノ花が、雛森の肩に、スッと手を置いて言った。
いつも穏やかな口調の彼女だが、今はその声音にも暗い影が見える。

「『渡』の夢には、現実に満足している者は取り込まれない、と。
現実に苦しみ、できることなら逃れたいと強く願う者だけが、『渡』の紡ぐ夢に堕ちるのだと」
「そ、そんな」
とっさにつぶやいた吉良に、皆の視線が集中した。

――　そんな・・・
あの二人が、心の底で逃げたいと思っていたなんて。
「あの二人に限って、それはない」と思っていた吉良には、それは信じられないことだった。
卯ノ花がそっと指を伸ばし、日番谷の前髪を梳(す)いた。
「お辛かったんですね」
もちろん、日番谷は無言である。
しかしその沈黙が、これ以上ない「肯定」を意味しているような気がして。
「日番谷くん・・・」
雛森の瞳から、どっと涙がこぼれ落ちた。

「・・・信じましょう、ふたりを」
嗚咽が響く中、卯ノ花はどこか寂しげな笑みを浮かべた。
「二人なら、例えどれほど辛くても。
きっと現実を・・・私達を、見捨てたりはしないはずです」

愛を乞ふ人（一）

連綿（れんめん）と続く曇り空のような。
そんな憂鬱で重苦しい夢を、ずっと見続けていたような気がした。
随分と青空を見ていない。
低く垂れ込めた灰色の雲を見上げる。
胸の奥に、澱（おり）が積み重なってゆく。
重いんだ。
誰かに叫びたいが、声が出ない。
――　あぁ。
自分の嘆息に、あまりにも実感が篭っていて・・・日番谷の意識は、急速に浮上した。

――　いい加減、起きねぇと・・・
俺がサボったら、誰が十番隊の仕事を片付けるんだ？
寝込んでる雛森の面倒も、見なきゃいけねぇし。
わざわざ見舞いに来ながら、部屋にも入らず消えた吉良のことも気にかかる。
チンタラ寝てる場合じゃ・・・

「おっっはよ！！」
朝の挨拶に名を借りた大音響が響いたのは、その時。
「な・・・」
日番谷は反射的に、バネ仕掛けの人形のように起き上がり・・・目の前にあった何かと正面衝突した。
「ってー・・・」
おかげで、一気に目が覚めた。
目覚めた端から顔面をぶつけるなんて、あまりにも隊長らしからぬ

失態だ。

ジンジンと痛む鼻先を押さえ、周りを見回した時・・・目の前にうずくまっている人物に目が行った。

「ひ・・・雛森？」

自分と同じように顔を押さえ、粗末な畳の上で悶絶しているのは、紛れも無い雛森の姿。

しかし、いつもの死覇装姿ではない。

薄い桃色の着物を纏い、藍色の帯を締めている。

襟元からも、帯と同系色の襦袢が覗いていた。

邪魔になるから、と死神になってからお団子にまとめていた髪も、すんなりと背中に伸びている。

「い・・・たぁ」

顔を上げた雛森を見て、日番谷は心中首を傾げる。

「お前、ちょっと太ったか？」

ガシッ、と首元に力強い感触を感じた。

ん？と思うまもなく、襟首を掴んだ雛森の顔が、日番谷の目の前にあった。

「太った・・・ていうのは禁句だって言ったでしょ。あ？シロちゃん」

「シロちゃんじゃねえ、日番谷隊長だっつってんだろ！」

心中で若干怯えつつ、負けじと言い返す。

しかし、雛森の反応は、いつもと違っていた。

「？」が十個くらい頭の周りに浮かんでいる。

「タイチョーって、隊長のこと？なんの？？」

「へ？」

何のって。

今度は日番谷が固まる番だった。

こいつ、ストレス溜まりすぎて、健忘症にでもなったか？
そっ、と雛森の表情をうかがう。

日番谷の心配など知る由もなく、雛森はケラケラと笑った。
「なーによシロちゃん、うなされてるかと思ったら、夢みてたの？
寝ぼけちゃダメだよ」
その屈託のない表情に、日番谷はめまいを感じた。
なんだ？どうなってんだ？

それにしても、雛森が、こんなに満面の笑みを浮かべるのを、久しぶりに見たと思う。
雛森が笑っているときは、後姿を見ても、肩だけ見ても、「笑ってる」と判る。
つまり、顔だけではなく、全身で笑いを表現しているのだ。
でも、藍染に裏切られてからの雛森の笑みは小さくなった。
顔だけの、作られた、人形のような・・・悲しい笑みばかり見ていたから。
それに、薄くなってしまっていた肩も、やつれていた頬も、ふっくらとして見える。
だから、太ったように見えたのだ。

「もぅ。ぼーっとしちゃって。今熱いオカユ作ってたから。食べたら目が覚めるよ」
雛森はふっと優しい笑みを浮かべると、その場から立ち上がった。
同時に、日番谷の視界が広がる。
――　ここ・・・潤林安（じゅんりんあん）の家じゃねえか・・・

日に焼けて、白っぽくなった畳。
節くれ立った柱。
使い込まれて、深い艶を放つ小さな箪笥（タンス）。

ガラスも嵌(はま)っていない、木製の窓は今閉められている。
１０畳ほどのその空間の中央には、赤々と炎が揺らめく囲炉裏があった。

見間違えようも無い、日番谷が祖母と、雛森と暮らした流魂街の家だ。
しかし、この家は、日番谷が隊長になってから建て直したため、今はなくなっているはずだった。
――　夢、か。
限りなく現実と感覚が近いが、こんなのが現実な訳がない。
――　冗談じゃねえ。早く起きねぇと・・・
そこまで考えた日番谷は、ハタと考え込む。
頬をつねって夢かどうか確かめる場面は知っているが、目覚めるにはどうしたらいいんだ？
夢なんだから、放っておいてもそのうち、目が覚める気はするが。

ふんふん、と鼻歌を歌いながら、雛森は土間に立ち、こちらに背を向けている。
葱(ねぎ)でも刻んでいるのだろう、包丁の音が、眠くなるような単調なリズムで響いている。
鼻歌と拍子をとるように、その右足のつま先が、リズミカルに地面を突く。
隣には、火にかけられた鍋がしゅんしゅんと音を立てていた。
――　静かだ、な。
音は充満している。
しかし、耳を穏やかに通り過ぎるそれらは、決して耳障りではない。
これほど凪いだ気分を、日番谷は久しぶりに味わった。

○　○　○

「はい、できたよ。シロちゃ・・・」
雛森が振り返った時だった。日番谷の肩が、不意にビクン、と揺れた。
「？どうしたの？」
さすがに異変に気づいた雛森が、眉間に皺を寄せる。
日番谷の視線は、雛森が右手に持った包丁の、白い煌(きらめ)きに向けられていた。

決然と日番谷を見据える瞳。
その瞳に浮かんだ、涙。
そして、日番谷の首元に突きつけられた、雛森の斬魂刀。

「――　っ！」
日番谷は、意識が深いところに堕ちそうになった瞬間、無理やり意識を引き戻した。
「大丈夫？」
包丁をまな板の上においた雛森が、座敷に上がると、心配そうに日番谷を覗き込んだ。
肩に置かれた雛森の手が、一瞬、刃物のように冷たく思えた。
「・・・大丈夫だ」
横目でその手を見ながら、日番谷はゆっくりと目を閉じる。

――　大丈夫だ。
雛森が俺に刀を向けたのは、単なるマチガイだ。勘違いだったんだ。
もう二度と、あんな惨劇(こと)は起こらない。たとえ、夢の中であっても
――
でも、いくら頭で説き伏せたところで、あの瞬間に感じた混乱は未だに生々しい。

日番谷冬獅郎が、雛森桃に殺される。
一瞬でも想像してしまったその景色は、思い出したが最後、何度でも意識を責め立てる。
そして、思い知らされるのだ。
何事も無かったかのように消し去ることなど、絶対にできはしないと。
「・・・雛森」
不意に口を開いた日番谷が、外からの足音に言葉を途切らせた。

愛を乞ふ人（二）

二人の視線の先で、戸口がガララ、と音を立てて退き開けられる。
ヒュウッ、と吹き込んできた冷たい風に、雛森が肩をすくめた。
「・・・寒」
言いかけて、日番谷はハッとする。
――　寒い？俺が？
氷雪系の力を操る日番谷は、極端に寒さに強いほうだ。吹雪の中でも、寒さを感じないほどに。
それが、隣にいる雛森が身震いしているのと同程度に、寒さを感じるとは。

――　霊圧が、消えてる・・・？
夢なんだから、何が起こってもおかしくないのだが。
改めて探れば、自分も、雛森も、凡人と変わらないレベルにまで霊圧が落ち込んでいた。
夢は、現実の願望を映す鏡だという。
でも、こんなに力が必要な時に、霊圧を無くしたいと自分が思っているとは、思えなかった。

「遊びに来たよー！！」
元気な子供の声に、日番谷は我に返る。
寒風に頬を真っ赤にし、土間に入ってきたのは、隣の家で暮らしている辰吉とあゆ美だった。
満面の笑みを浮かべた二人に感じたのは、まず居心地の悪さ。
潤林安にいたころ、この二人は日番谷のことを避けていた。
嫌われていたというよりも、霊圧を制御できてなかった俺を恐れていたのだろう。
互いに存在を気にしてはいたが、口を利くことはもちろん、目を合

わせることすら碌(ろく)になかったのだ。
これが外なら、さりげなくその場を外せるが、ここは狭い家の中。
ふたりが立っている戸口を通らなければ、外へは出てゆけない。
――　困ったな。
自分らしくない感情が広がった時だった。
日番谷の肩を、誰かがガッ！と掴んだ。

「シロー君、顔色悪いよ？大丈夫？」
・・・この声、あゆ美か？
考えられないことだった。殊の外日番谷に怯えていたあゆ美が、触れてくるなんて。
振り返った日番谷は、更に衝撃を受けた。
・・・あゆ美の目が、見事にハート型だ。
「・・・」
なんだ？この夢では、こういう設定なのか？
日番谷の心に、さっき浮かんだ言葉がまたよみがえる。
――　夢は、現実の願望を映す鏡だという。
さすがに、これは無ぇだろ。
日番谷は頭の中で突っ込んだ。

「あたしと二人で、でーとしようよ！そしたら元気になるよ」
「へっ？」
さきほどまでとは違った意味で、日番谷はたじろいだ。
現実の世界では、日番谷はモテるらしい。
らしい、というのは、乱菊がいつもそう言っているからだ。
護廷十三隊の隊長ともあろう者を、正面切って口説く女性などいないため、日番谷本人に自覚は無いが。
だから・・・こういうアカラサマな言葉には免疫が無かった。
その時、もう片方の肩を後ろから掴まれた。

「ちょっと！何言ってんのよいきなり！」
振り向けば、それは雛森だった。あゆ美に向かって、本気で怒っている。
――　なんでだ？つーか、何やってんだ？
ガミガミやりあっている二人を眺めて、日番谷が途方にくれていた時。
「お前は、いいよなぁ」
いつの間にか近くに来ていた辰吉が、日番谷に耳打ちした。
「桃ちゃんとあゆ美、両方に惚れられるなんてさ。桃ちゃん、俺にくれよー」
「・・・」
日番谷はその時、己の深層心理を疑った。
こんな願望を持ってんのか、俺は？

日番谷の当惑など知るわけもなく、辰吉は少女二人に向き直った。
「ケンカするために遊びに来たんじゃないだろ。
表で、コマ回し大会やってんだ。お前らも来いよ」
「あ、行く行くー！」
雛森が、さっきまでの剣幕はどこへやら、辰吉に笑顔を向ける。
「ね、シロちゃんも行くでしょ？」
ぐっ、と詰まった日番谷だが、すぐに諦めた。

――　毒を食らわば皿までだ。
夢から覚める気配も、今のところないし。
ここでコマ回しを拒んで家にいたところで、早く夢から覚めるのでもなさそうだし。
案外、ミスッた誰かのコマでも頭に飛んでくれば、目が覚めるかもしれない。
それに・・・認めるのも何か嫌だったが、ちょっとだけ、この夢を楽しんでもいいか、という気分になっていたのである。

○　○　○

夕刻。
冷たい風に混じって、ちぎれた綿のように乾いた雪が混じる。
子供達の影が、長く長く後を引いた。
「じゃーね、また明日！」
コマ遊びに興じていた子供たちが、次々と家路に向かう。

「シロー君、こんなにコマ回し強いなんて知らなかった！また教えてね！」
「あ、俺にも、俺にも！」
あー。
日番谷は適当に返事をする。
どうせ夢なんだから、ちょっとだけ。
そう思ってコマ回し大会に参加し、あっさり優勝し、コマ作りの腕まで披露してしまった。
「どうせ」とか、「ちょっとだけ」どころじゃない。

ただ・・・正直言って、楽しかったのだ。
隊長らしい威厳を、なんて考えなくてもいい、子供じみた時間が。
こんなに屈託無く笑ったのは、護廷十三隊に入隊して以来じゃないかと思った。

「桃ちゃん、おうちに帰ったら、足診てもらってね！」
そんな声も日番谷に向かって投げかけられる。
正確には、日番谷の背に負ぶわれた、雛森に。
「う、うん・・・」

照れ笑いした雛森が、背中で身じろぎするのを感じる。
寒さに抵抗力が無くなった体に、雛森のぬくもりが心地よかった。
雛森の右足には、白い手ぬぐいが、包帯代わりに巻かれている。
――　全く、コマ回し大会で足をくじくなんて、どこまでドジなんだ。
結局夢でも現実でも、面倒ばかり見ているような気がする。
日番谷がそう思ったとき、
「シローくん、重いでしょー」
隣を歩いていたあゆ美が、揶揄(やゆ)するように雛森を見て言った。
「お、重くなんて・・・」
雛森が口を尖らせて、恥ずかしそうに黙った。
「重くねーよ、別に」
肩をすくめて、俺は返す。
霊圧と共に体力も失ったらしい日番谷にとっては、本当は言うほど軽くはなかったが。

角を曲がったところで、日番谷はふと、足を止めた。
そこには、圧倒的な存在感で、荘厳な精霊廷がそびえていたからである。
明るい夕日に照らされて朱に染まった、白い建物。
それは、それこそ夢のように美しかった。

「あ！あそこにいるの、死神だぜ！」
「わー、かっこいいね！憧れちゃう」
あゆ美と辰吉の言葉に、日番谷はふたりの視線の先を追った。
――　総隊長・・・
杖を手にした、老死神の姿は、見間違えようが無い。
現実と同じ、厳しい表情で、周りの死神に何かを指示している声が

聞こえてきた。
一人が日番谷の方を、ちらりと見やった。
――　朽木ルキア。
遠目でも、その黒目がちな大きな瞳が、こっちを見ているのが判る。
しかしその表情は何も反応せず、すぐに総隊長に戻された。
「すごいねー、死神さんって。大変なんだろうね」
雛森の無邪気な声が背中から聞こえ、日番谷はしばし、考え込む。

もしも、雛森も日番谷も、凡人と同じように霊圧を持たなかったとしたらどうなっていただろう。
ふと、そんな想いが頭をよぎったからだ。
もちろん、二人とも死神になることはなく、この夢のように流魂街に留まっただろう。
日番谷は、高すぎる霊圧のせいで皆に避けられることもなく、普通の子供として毎日を送ったはずだ。
雛森も、藍染と会うこともなく、憧れることも無く。裏切られることも無かった。
そして・・・日番谷と雛森が刃を向けあうような未来も無かったはずだ。

深刻な表情で何かを相談しあっている、死神たち。
でも、その会話はもう気にかからなくなっていた。
「帰ろうぜ」
日番谷は、精霊廷に背を向けた。

愛を乞ふ人（三）

「ばいばい、また明日ね！」
「うん、また明日！」
「じゃぁね」
辰吉とあゆ美と別れ、日番谷は雛森を負ぶったまま、ゆっくりと家へ向かう。

「どうしたの、シロちゃん。さっきからボーッとして」
「・・・なんでもねぇよ」
雛森の声を聞くと、熱に浮かされて藍染を呼んでいた、雛森の声を思い出す。
――「藍染・・・隊長」
その頬を伝う無意識の涙を、どうしてやることもできなかった。
傷を負えば手当てしてやれる。熱を出せば看病してやる。
でも、心にまで入っていって、ぽっかりと開いた穴を、埋めてやることはできないんだ。
その胸の穴の形は、きっと日番谷の形とは違っているのだ。
雛森が求めているのは、自分ではないのだから。

「シロちゃん」
日番谷の首に回された雛森の手に、力がこもった。
「あったかいね」
その声が、あまりに安心しきったもので。
日番谷はつかの間、足を止める。
「シロちゃんが、いてくれてよかったよ」
不意打ち。
日番谷の頭に、そんな言葉がよぎる。
それと同じ言葉を、少し前に聞いたことがある気がする。

――　あぁ。
五番隊の私室でそれを言ったときの雛森の声音は、こんなじゃなかった。
――　こんな悲しそうな声で、そんなことを言うんじゃねえよ。
そう、想ったものだ。
思わず、日番谷は振り返った。
夢の中の雛森は、眠ってはいなかった。
心から幸せそうな顔で・・・頬に朱を刷(は)いて、微笑んでいた。
だから、日番谷もやっと返せた。
「俺もだ」
雛森の頬の朱が、見る見る間に濃くなるのを目の端に捉え、日番谷は慌てて前を向く。
これは、ただの夢。現実と現実の狭間の、ちょっとした一休み。
だから、ちょっとくらいいいか。夢に休んでも。

○　○　○

闇の中に、深深と雪が降り積もってゆく。
日番谷は、ゆっくりと引き戸を閉じ、狭い部屋を振り返った。
囲炉裏の炎が静かに燃える小さな部屋は、まるでかまくらのように閉じていて、あたたかい。
「あらあら、この子は、風邪引くよって、いつも言ってるのに」
布団の上に座ったまま、うつらうつらしだした雛森を見て、祖母の梅は微笑んだ。
「んー・・・判ってる」
寝ぼけ眼で、雛森が頷く。コテン、とその頭が膝に落ちた。

狭い布団いっぱいに、3人分の布団を引いて。
梅と雛森と日番谷の3人で、取りとめもない話をした。
今年の冬はいつもより寒いようだ、とか。
最近出来た甘味処の餡蜜(アンミツ)がうまい、とか。
話しながら眠くなって、眠って、起きたときにはもう忘れているほど、取り留めの無い。

――　夢の中で寝たら、どうなるんだろう・・・
日番谷は、そんなことを考える。
夢で寝て、次に起きるときには、現実の世界なんだろうか。
そうだとすると、少し・・・もう少し、起きていたい気がする。
「寝ないのかい？冬獅郎」
「あぁ、あんまり眠くないんだ」
行灯の傍で胡坐(あぐら)をかき、薄い本をめくる日番谷を、梅は黙って見つめた。
「なんだよ？ばーちゃん」
「・・・お前は、どこにもいかないだろうね」
「え？」
文字を追っていた目が、ぴたりと止まる。

「何でだか判らないんだけどね。お前と桃が、この家を出る夢を見たんだよ。
こんな風に雪が降って、隣の家の声も聞こえないような夜に、私はたった一人でねぇ。
さびしくて、辛かった。今朝お前たちの寝顔を見てほっとしたよ。
お前たちが私を置いていくなんて、あるはずないのにねぇ」
・・・あぁ、ばあちゃん。
俺は、そういう未来を知っているよ。
ばあちゃんを一人取り残してまでも家を出て、死神になる道を選んだ未来を。

「本物の」ばあちゃんは今頃、たった一人でうちにいて、きっと俺達のことを想っている。
帰ってやりたいと心から想う。
屈託なく三人で一緒にいられた、あの時に。
でも、どこで道を間違ってしまったのか。もう、戻る道が分からないんだ。
もう、永遠に見つからないとでも言うように。

でも、それが現実だ。
これはたかが夢だ。事実じゃない。
俺の願望が見せる、幻に過ぎないんだ。
それなのに、俺は。

「冬獅郎、どうしたんだい」
立てた片膝の上に腕を乗せ、その上に顔を突っ伏した日番谷を見て、梅は怪訝な顔で歩み寄った。
「冬獅郎？」
問われても、日番谷は顔を隠したまま、頑として上げようとしない。
「変な子。どうしたんだろうね、一体」
皺だらけの手が伸ばされ、日番谷の銀色の髪をゆっくりと撫でる。
「怖い『夢』でも、見たのかね」
これが、「夢」だというなら。俺が知っている現実は、「悪夢」に違いない。
「・・・どこにも行きやしねーよ、俺は」
自分に言い聞かせるように。日番谷は、そうつぶやいた。

愛を乞ふ人（四）

その夜は、叩きつけるような雨が降り注いでいた。
時折、雷光に照らされ、雨に打ち叩かれる大地が目の当たりになる。
それが無ければ、闇の中にたゆたっているような・・・
そんな気持ちにすらなる、濃度の濃い闇が辺りには広がっていた。
乱菊は、雷光の中に照らされる死覇装の背中を頼りに、必死に歩む。

「・・・松本」
振り返ったのは、十番隊の上官。
十番隊に入隊したばかりの自分の面倒を見てくれている、第九席、陣内だ。
「ここで待ってろ。それか先に精霊廷に戻っててもいいんだぞ」
ぶん、と乱菊は一度、首を振って返した。
「まだ席もない新米だって、護廷十三隊の死神です。
それにあたし、こんな闇には慣れてるんです。一緒に行かせてください」
「確かに。この場では、お前が一番平気そうだな。さすが流魂街の出身だけある」
その言い方に、皮肉の色はない。
闇に戻った視界では見えないが、陣内が苦笑したのがわかった。

貴族出身の死神は、どうしてもこういう劣悪な環境には抵抗力が無い。
しかし流魂街の中でも治安の悪い地域に育った乱菊にとっては、この程度は日常だった。
轟く雷鳴。鳴動する大地。
ビリビリと体に響くそれが、自然現象によるものか・・・
この先に潜む、強大な気配によるものかは、もう判らない。

「・・・たく。見回りに出ておいて、こんな霊圧ほっとくわけにもいかないな」
「ただし深入りは禁物だ。気づかれぬように、霊圧は確実に消しておけ」
先輩の死神たちが、言葉を交わすのが途切れ途切れに聞こえてきた。
十番隊第九班、総勢十名あまり。
並みの敵なら、この人数がいれば相手にはならない。
しかし、今感じている霊圧は・・・底冷えがするような得体の知れなさを醸し出していた。

――一体、何なの？
こんな霊圧を、乱菊は知らない。
この気配の元を確かめて、一刻も早く精霊廷に戻り、副隊長に報告すること。
それが出来なければ、温かい布団も遠そうだ。

「ッぎゃあぁ！！」
唐突に、闇夜を悲鳴が貫いた。
なりふり構わぬ、恐怖と苦痛に支配された断末魔に、その場の全員が同時に伏せる。
「待ってくれ、俺達で一体何をしようと・・・」
何？
乱菊は、その場に伏せたまま、前方をうかがう。
しかし、闇に加えて、茂みの向こうになっていて全く様子は見て取れない。
それにしても・・・今の悲鳴。
どこかで聞き覚えがある。
そう想った瞬間、怖気が背中からこみ上げてきた。
「今の声、五番隊の隊士じゃないか？」

是。乱菊は、誰かの声に心中頷いた。
その時、ひときわ高い雷鳴が轟いた。そしてそれと同時に、聞き間違えようの無い声が響き渡った。

「やめてくださいっ、藍染副隊長！」

カカッ、と雷光が断続的に、天を渡った。
その間断なき光は、出来損ないのフィルムのように、その場の風景を映し出す。
死覇装姿の死神の体がよじれ、異常なダンスを踊るところを。
その口から何かが大量に吹き出し・・・顔を、全身を覆ってゆくところを。

「ぎゃあああ！助け・・・」
その現実味がない風景が、確かに起こっているという証明のように。
悲鳴が木霊する。
乱菊はその声に、思わず手を伸ばす・・・が、その手の先で、死神の姿はフッと消えた。
音も無く、体を失った空の死覇装が空気にふくらみ・・・地面に落ちた。

「あぁ、また実験は失敗だよ。やはり死神を虚化するのは生半な手段じゃできないな」
この声！
それが藍染に違いないと確信すると同時に、乱菊の脳裏によぎったのは、銀髪の幼馴染。
藍染の直ぐ下、第三席の場に付いた市丸ギンのことだった。

「松本！直ぐ精霊廷に戻れ！」
ガッ、と陣内に肩を掴まれた。

「死神の虚化(ホロウ)など・・・何をたくらんでいるかは知らんが、絶対の禁忌だ！お前は直ぐ・・・」
「それに、残念なことだな。観客は僕らだけじゃなかったようだよ」
「・・・！」
その藍染の声に、その場の全員が斬魂刀に手をやった。

「そうみたいやなァ。どうします？」
続けて響いた声に、乱菊は思わず、斬魂刀の柄から手を離した。
「仕方ないね。この場を見られて、精霊廷に戻られては困るんだ」
そんな・・・嫌だ。
こんなのは、嫌だ。
ゆっくりと、こちらに歩み寄ってくる足音。
その、少し引きずるような足音だけで、その主が誰か、乱菊にはわかってしまうのだ。
「じゃ、殺しとくわ」
全く邪気のない、サラリとした声。

「松本、行けっ！」
陣内と同時に、他の十番隊士たちも立ち上がる。
歩み寄ってきた少年の顔が、闇夜に浮かび上がる・・・
その表情は、全身から放たれる蛇のような殺気とは裏腹に、意外なものを見た子供のようだった。
「・・・乱菊？」
その細い目が見開かれ、わずかに朱の瞳が覗く。
茂みの奥で伏せた、乱菊と視線がぶつかる。

「・・・ギン！やめて！」
乱菊を認めたギンの瞳が、ゆっくりと弓形にゆがめられた。
笑っている・・・まるで、精霊廷内でばったり、乱菊と会ったように。

ただ違うのは、斬魂刀「神鎗」を抜き放っているということ。
「相手は藍染副隊長、市丸三席の二人だけだ、数なら我々が勝る！捕縛せよ！」
陣内の声に、乱菊は首を振りながら後ずさった。
――　違う・・・違うのよ、この二人は・・・
「あァ、アカン」
乱菊の心を代弁するかのように、ギンが笑みを含んだ声で言い放つ。
「アカンわ。アンタらが、ここから生きて帰れるはずが、あらへん」

愛を乞ふ人（五）

・・・それから、どれくらいの時が流れただろうか。
ふわり、と柔らかいものの上に、体が降ろされた。
ふっ、と目を開けると、白いシーツが目に映った。
――　あぁ、帰ってきたの・・・？
ぐったりと脱力した乱菊の上に、掛け布団がそっ、とかけられた。
そのままの体勢のまま、乱菊は顔を正面に戻す。
すると、布団の脇で胡坐をかき、こちらに身を乗り出した市丸と目が合った。
「・・・！」
途端に、全てを思い出す。

視界に映った市丸は、闇の中で出会った時と同じように、少し困った顔でそこにいた。
「十番隊の、みんなは・・・」
喉の奥から押し出した声は、驚くほどかすれていた。
聞かなくても、判っている。
市丸の全身から発せられている、血の香りの意味くらい判っている。

「ええか、乱菊」
振ってきた市丸の声は、優しかった。
「お前は、あの場にはおらんかった。熱出して、一日寝とったんや。ええな」
そのまま立ち上がろうとした市丸の袖を、乱菊の手が捕まえる。
決して強い力は無いのに、市丸はぴたりと動きを止めた。

「・・・同情なら要らないわよ」
力はこもっていなくても、底冷えのする殺気を市丸に向ける。

「あたしは十番隊の死神よ。仲間を殺されて、黙ってると思うの？」
上半身を起こし、真っ向からギンをにらみつけた。
「黙っていて欲しいなら・・・あたしを『殺しなさい』」

息詰るような沈黙が、その場を支配する。
「・・・嫌や」
燃えるような乱菊の瞳の前に、しばらく黙っていた市丸が、ぽつりとつぶやいた。
まるで、子供のように首を振る。
そして、乱菊の手を振り払おうとした。
「嫌・・・嫌ってなによ！」
乱菊は、その袖を衝動的に掴み、引き寄せた。
市丸は抵抗も見せずに身を退き、力が入らない乱菊の体は、ギンの胸に崩れ落ちた。

「何なのよ、アンタは・・・」
決して抵抗はしない、手荒く扱うわけでもない。
しかしその両手は、決して乱菊の背中に回されることも無い。
「抱いてもくれないくせに！忘れさせてもくれないくせに！！中途半端なことはやめて！」
ギンのことが憎い。憎くて、憎くてたまらない。
そして、ギンを思うたび、悲しくて・・・胸が張り裂けそうになる。

「・・・出て行って」
ここから。
あたしの心から。

市丸は、しばらく微動だにしなかった。
その男にしては細い指が、つい、と乱菊の額に伸ばされる。
額に張り付いた髪を、ゆっくりと横に寄せた。
ためらいがちに、その顔が額に寄せられ・・・
びくり、と乱菊が体を強張らせた時、市丸は相反する磁力に跳ね返されたかのように、身を退いた。
そのまま、優しく乱菊を自分から引き離すと、スルリと立ち上がる。

「・・・お休み」
振り返らない。
その長身が、滑るように障子の隙間から闇に解けてゆく。
「・・・」
乱菊は、冷水を浴びせられたかのように、しばらくそのまま動けずにいた。
やがて、布団の上に突っ伏し・・・空虚な気持ちを一人、抱きしめる。
あんな男に、あたしの本心を告げることは無い。決して無い。
でも・・・それを思うたび、あたしは、壊れてゆくんだ。

○　○　○

目を開けた時、一番初めに目に入ったのは白い布地だった。
一瞬、同じ夢の中にまだいるのだと思ったが、その先に広がる景色が、乱菊を我に返らせた。
「・・・」
無言で、長椅子の上で上半身を起こす。

初めに見やった隊首席は、無人だった。
部屋の中に燈はないが、開け放たれた窓から差し込んでくる夕日に照らされ、明るかった。
不意に、ポツン、と死覇装の膝に何かが落ちる。
それが涙だと気づいた乱菊は、無言で目をこすった。

窓の外からは、様々な声が聞こえてくる。
稽古中なのか、竹刀で打ち合う音。話し声、笑い声。
門を開ける、ぎぃ・・・という物音。
いつもどおりの黄昏（たそがれ）だった。
でも、乱菊のいる場所だけが、深海のように取り残されていた。
ここは静寂、そのものだった。

隊長に会いたい。ふとした空白に、乱菊はそう思う。
乱菊がただ一人、絶対の服従を誓った、あの少年に。
もしも、乱菊が打ち明けたら、あの翡翠の瞳は、どんな彩（いろ）に変わるだろう。
藍染と市丸の裏切りの証拠を、自分が百年も昔から握っていて、その上で黙っていたと知れば。
それでも、何事も無かったかのように。
――　松本。
あの少年にしては低い声で、自分を呼んでくれるだろうか。

・・・そうに違いないわ。
乱菊は、そう思う。
乱菊一人の弱さや危うさを受け止めるくらいの器は、持っている子だから。
だから、そんなときふと思うのだ。
もしも、幼い頃の乱菊が出会ったのが、市丸でなく日番谷であったなら。

自分は、どんな人生を歩んでいたのだろうと。
少なくとも、今のような心の危うさを、抱えずにすんだはずだと思う。

たん、たん。
廊下を歩いてくる、軽い足音が聞こえる。
深海に沈んだこの部屋の扉を開けに、日番谷冬獅郎がやってくる。
「おかえりなさい、隊長」
扉が開くと同時に、乱菊は立ち上がり、扉に歩み寄ろうとして・・・
固まった。

愛を乞ふ人（六）

「何で泣いてるん？」
乱菊は、その場に立ち尽くしたまま、しばらくリアクションを取れずにいた。
あらゆるシチュエーションの中でも、最もありえないと思える男が、そこにはいた。
「なんや、お前に隊長って呼ばれるなんて、どういう風の吹き回しや。
じゃぁこっちも呼んだるわ。『松本副隊長』」
「はぃ！？」
力いっぱい、乱菊は聞き返した。
「市丸ギン！あんた、十番隊舎で何やってんのよ！日番谷隊長はっ！？」
「日番谷？誰やそれ。このボク以外に、十番隊隊長がおると思うん？」

「・・・へ？」
乱菊は、言葉も失ってまじまじとギンを見た。
見ると、市丸も同じように乱菊を凝視している。
乱菊は、無言で右手を、横に払った。
「は？何やねん」
「いいから。後ろ向いて、後ろ」
不服そうに口を尖らせながら、ギンが乱菊に背中を見せた。
そして・・・その背中の隊首羽織に刻まれていた数字に、一瞬（めまい）眩暈を起こしそうになる。
――十。
何度見直しても、見間違えようも無い、その数字。

「・・・なんだ、夢か」
乱菊は、ぽんと手を打った。
こいつが十番隊隊長だなんて、天地がひっくり返ってもありえない。
それ以前に、虚圏に去ったこいつが精霊廷にいるわけが無いではないか。

「オイ！そんなことより、日番谷って誰や！ボクを差し置いて！」
夢の分際で、態度がでかいわね。
「判った、判った。アンタは十番隊の隊長っていう設定なのね。そしてあたしは副隊長」
「設定って何やねん。それ以外にあるか！？脳ミソに何か湧(わ)いてもたんか？」
ふーん、あたしが副隊長って設定は有効なのね。
夢に悪口言われても、言い返す気にもならない。

「ンなことより、日番谷って誰や！」
しつこい！
「日番谷隊長はねー・・・」
あたしは、隊首机の上に、煉瓦(レンガ)のような分厚さで積みあがった書類を、うんざりして眺めた。
「アンタの十倍は頭が良くて、百倍は仕事が早くて、千倍はまともな隊長よ！」
夢は見る人の願望を表すというが、絶対に嘘だ。
市丸ギン・十番隊隊長。松本乱菊・十番隊副隊長。
仕事が回るはずがないではないか。

夢になんか興味はない。
乱菊はギンを無視して、隊首室を出ようと立ち上がった。
外の空気を吸いでもしたら、夢から覚めるかもしれない。
「夢とはいえ、あんた。ちゃんと働きなさいよ」

すれ違いざまにそういい残し、廊下に出ようとした。
その時。
市丸の手が、さっと動いた。
乱菊の視線が追いつく前に、乱菊が肩にかけていた桃色のショールが、するっと抜き取られる。
空中に投げ出されたそれが、風に膨らみ、ゆるやかに床に落ちた。

ズキン、と胸が確信じみた予感に痛む。
顔を上げたとき、市丸の真紅の瞳と至近距離でぶつかった。
その瞳が、弓形に細められる。
乱菊は、本能的に背後に下がろうとした。
しかし、その背中に、温かく大きなものが添えられ、乱菊の動きを止める。
それが市丸の掌だ、と気づくより前に、迷いの無い力で思い切り引き寄せられた。

「・・・ンッ！」
市丸の二の腕を、乱菊の指が掴む。
弓なりにしなった背中を、市丸の大きな手の平が撫で上げた。
こんな感覚、知らない。
ただ、ゾクリと全身が粟立った。
柔らかいものが唇に押し当てられ・・・乱菊は、やっと事態を理解した。

「なに・・・すんのよ！」
顔を背け、唇を市丸から引き離す。
そして、力の限り市丸の体を突き飛ばした。
自由になった乱菊が、背後に下がろうとしたとき、ヒラリと舞った帯の端を市丸が掴んだ。

「・・・」
乱菊がぴたりと動きを止め、市丸を睨み付けた。
抱き寄せられ、唇を奪われたからといって、それだけで動揺するほど初心(うぶ)じゃない。
――　これは・・・夢？
乱菊はつかの間、目の前の市丸を凝視したまま、逡巡(しゅんじゅん)した。
それ以外にありえない。
でも・・・そう思う心とは裏腹に、心臓は烈しく高鳴っていた。
乱菊に触れた瞬間、小刻みに震えていた市丸を、感じ取ってしまったからかもしれない。

睨み返した乱菊が目にした市丸の表情は、見慣れないものだった。
「なんやの？ボクのこと、もう飽きてもた・・・？」
乱菊の帯を掴んで引き止めたものの、中途半端に止まった手。
途方にくれた表情。

――　なに？この倦怠期の夫婦みたいな会話・・・
乱菊は、ゆっくりと市丸の傍に歩み寄った。
「あたたた、あいた！なんでいきなり頬っぺた抓(つね)るねん！」
「・・・いや、やっぱり夢だろと思って」
「アホか、自分を抓れ！ていうか、お前まだ寝ぼけてるんか？」

乱菊は、傷んできたこめかみを押さえた。
――　アッタマ痛いわ、もぅ・・・
軽はずみで、ニヤニヤしていて、掴みどころが無い。
人のことなんてどうでもいいような顔をするくせに、スルッと人の心の隙間に侵入してくる。
どこから見ても、この世でただ一人、乱菊に頭痛を起こさせる男「市丸ギン」に違いなかった。
今だって真面目なのかふざけているのか、さっぱり分からない。

一瞬の空白の間に、市丸が歩み寄った。
その表情に、さっきまで浮かんでいた笑みはない。
乱菊を圧倒する長身に、たじろぐ。
ズキン、とまた胸の奥が痛んだ。

「そこにおって」

乱菊が思わず下がろうとしたとき、市丸の声が降ってきた。
――　違う。
こんなのは、市丸の言葉じゃない。
それはいつも、乱菊が市丸に伝えたかった言葉だ。
スッ、と伸ばされた市丸の指が、乱菊の小麦色の髪を撫でる。

「ギン」
ギンの姿が、もう見えない。
あまりに、近すぎるから。
二人の耳が触れ合い、柔らかな銀髪が頬をくすぐる。
「乱菊。愛しとるよ」
「・・・」
乱菊は、目を見開いた。
切ない気持ちが、胸の奥からせりあがってくる。

こんな風に、こんな形で。
心の奥底にひた隠しにしていた願望を、剥き出しにされるなんて。
――　夢でまで残酷な男ね、アンタ。
押し返そうとしても、次から次からこみ上げてくる思いの波に、乱菊はひとつ、喘いだ。
自分の願望が生みだす幻の中での、一人芝居だということは判っている。

それでも。

「どこにも行けや、しないわよ・・・」

波に、飲み込まれてゆく。その流れに抗えない。
どうせ、観客は乱菊だけなのだから。心のままに振舞っても、誰も見ちゃいない。
もう躊躇(ためら)わず、乱菊はその背中に腕を回した。
かすかに、香の薫りがした。

愛を乞ふ人（七）

二週間後。乱菊は、精霊廷の大通りを歩いていた。
その足取りは軽い。
なぜなら、今は金曜日の夕方。仕事収めをした直後だからだ。
「お疲れ様です、松本副隊長！」
「はーい、おつかれー」
すれ違った死神たちに返す言葉に、暗い影は全く無い。
ピリリ・・・と懐から音が鳴り、乱菊は伝令神機を引っ張り出した。
「はーい、もしもし。あ、京楽隊長？え？もう呑み始めてる？いくらなんでも早くないですか？
まぁいいや。あたしももうすぐ合流します！はいはい。それじゃあ」
パシッ、と音を立てて伝令神機を閉じ、また懐にしまった。

「仕事収めの酒は、やっぱりサイコーよね！」
例え、ほとんど働いていなかったとしても。
ただ、その必要も特にない、と思う。
なにしろ平和なのだ。精霊廷は、ここ百年以上にわたり、太平の世を謳歌（おうか）している。
適当に働いて、仕事の後は馴染（なじみ）の死神と酒を酌み交わす。
そんな生活を、いつからとも判らないずっと昔から、続けてきたような気がする。
そしてそんな日々は、これからも続いてゆくのだろう。

「あ、そーだ」
乱菊は、少し視線を宙に泳がせた。
彼女の上官、そして恋人でもある市丸ギンの姿が、脳裏に浮かんでいた。

これからの飲みの席に、隊首会の後に合流すると言っていた筈。
「アイツ、甘いものを肴(サカナ)に酒飲むの好きだからな。何か買っといてやるか」
乱菊には信じられないが、市丸は饅頭(まんじゅう)や団子と一緒に酒を飲むのが好きなのだ。
しかし、ある意味しょうがないと思うが、飲み屋にはそんな甘いものはあまり置いてない。
前にそれでブーブー文句を言っていたのを思い出していた。

うーん、と伸びをしつつ、乱菊は流魂街に足を踏み出した。
流魂街に食べ物屋の数は少なく、味は精霊廷の方が段違いに上なのだが一箇所だけ。
乱菊も市丸も唸(うな)るほどの、うまい甘味処があるのだ。
「おじさーん！甘納豆ちょうだい！！」
店先に立ち、そう呼びかけたときだった。
その大声に振り返った一人の少年に、乱菊の視線は吸い寄せられる。

「あの子・・・」
粗末な着物に身を包み、素足に草履を履いた、典型的な流魂街の子供達が5・6人たむろしている。
その中の一人・・・銀髪の少年を見て、乱菊は思わず、声を上げた。
「日番谷隊長・・・！」
その隣にいる黒髪の少女は、雛森桃に違いない。
乱菊の視線に、日番谷も気づき、視線を合わせてきた。
「おい、シロー。これ食っちまうぞ！」
「コラ！これは俺のだ！」
しかしその視線は、駄菓子を取ろうとしてきた少年にすぐに逸らされた。

――　そっか。
乱菊に一瞬向けた視線は、道端で偶然であった他人に向けるもの、以外の何者でもないように思えた。
明るい表情で何かしゃべっている日番谷の姿は、普通の子供にしか見えない。
――　あたしのことなんて、知るはずないか・・・
これは、自分が見ている、いつ終わるとも知れない「ユメ」なのだ。

確かに、これもあたしの望みかもしれない、と乱菊は思い起こす。
雛森の裏切りに傷つき、もがき苦しみながらも、独りで耐えている背中を見て思ったのだ。
この状態を招いたのは、死神にならないかと強引に誘った、自分の責任でもあると。
持って生まれた霊圧が、死神になるのを不可避とするなら、いっそ。
霊圧など持たぬ普通の子供でいてくれればよかったと、思ったこともある。
――　これでいい。
ちょっと、さびしいけれど。

――　「ヒツガヤ、トウシロウ君っていうの？」
その時、不意に頭によみがえってきたのは、細い少女の声。
そして、その声を聞くと同時に感じたのは、言い知れぬ焦燥。
「なんだった、かしら・・・」
なんで自分はあの時、あんなに必死だったんだろう。なんのために？
思い出せない。
深く考えようとすると、逃げ水のように遠ざかってしまうのだ。

「ま、いっか」
乱菊は、あっさりと取り留めの無い考えを振り払った。そして、日

番谷たちのほうを見る。
「おーい、アンタ達！」
乱菊は、穏やかな気持ちで、日番谷たちに声をかける。
「早くおうち帰んなさいよ！」
祖母が、待っているのだろう。
日番谷は、そんな乱菊を見やる。その口が、への字にゆがめられた。
「うっせーよ、ババア！」
「！」
乱菊がその場に固まる。
口、悪いのは変化なし？

「コラ！」
乱菊が何かを言うよりも先に、雛森が日番谷の頭を小突いた。
「死神さんに、そんな口の利き方したらダメじゃない！本当にすみません！」
後半の言葉は乱菊に向けられた。
そして、無理やり日番谷の頭に手をやり、頭を下げさせようとしている。
「いーわよ。何か声がしたような気がしたけど、姿が見えないわね。小さすぎて」
「！」
日番谷の顔がビシッ、と固まる。

「おーい。乱菊―？何しとるんや？」
その時、背後から聞こえた声に、乱菊は振り返った。
「あら？ギン？」
「おー。隊首会早く終わったからな。お前の霊圧感じて追ってきたんや。何やっとん？」

長身の姿が、ゆっくりと歩み寄ってくるのを見た乱菊の表情が和らいだ。

「甘納豆買おうと思って。それだけよ」
市丸と話しながら、ちらり、と日番谷を横目で見る。
日番谷は、何人もの友人達に囲まれ、笑っていた。
これほど無邪気な笑い方ができるとは・・・夢にも思わなかった。
――　良かったね。どうか・・・ずっと、このままで。
乱菊は、心の中で日番谷に呼びかける。

「行くで、乱菊。みんなが待ってる」
「えぇ」
さよなら。
その場から、すっきりした気持ちで背を向ける。
並んで歩く二人の背中が、精霊廷に消えていったころ。
「どうしたの？シロちゃん？」
「いや、何でもねぇ」
日番谷は、二人を見送っていた視線を、雛森に戻した。
そして、誰にも聞こえないような小さな声で、つぶやいた。
「・・・良かったな。松本」

― kurui（1） ―

日番谷と乱菊が目覚めなくなってから、はや一ヶ月が経過していた。
雪の朝だった。
地面には膝くらいまでの雪が積もり、行き交う死神たちの足取りも、自然とゆっくりになる。

「吉良副隊長！おはようございます」
四番隊舎の軒先で雪を払い落としていた人影を見て、女性隊士が声をかける。
「・・・あぁ。雛森君は、今日も？」
病室のほうを指差すと、雛森と年もそう変わらないと思われるその隊士は、暗い表情で頷いた。
「せめて気晴らしができると、良いのですけど・・・」

階段を上がる吉良の足取りは、重い。
病室をノックしたが、返事が無い。
「雛森君・・・入るよ」
そっ、と声をかけ、なるべく音がしないように、引き戸を開けた。

吉良の視界に飛び込んできたのは、こちらに背を向けた、雛森の背中だった。
吉良が入ってきたのに気づいているのかいないのか、足音にも微動だにしない。
窓際のベッドに横たわる日番谷を、じっ・・・と見下ろしているように見えた。

「雛森君」

雛森の直ぐ後ろまで近づいても、雛森は反応しなかった。
いたたまれなくなり、吉良はその肩に手を置く。
骨の感触を直に感じ、慄然(りつぜん)とする。

「吉良・・・くん？」
振り向いた雛森の視線は、吉良を通り抜けた。
その瞳は、冥(くら)い穴のように空(うつ)ろだ。
「今朝、山本総隊長のご決断で、決まったことがあるんだ」
吉良は、なるべく平静に聞こえるような声で言うと、懐に入れてきた紙を、雛森の前に置いた。

「五番隊、十番隊の二隊を廃(はい)し、他の隊に均等に隊士を割り振ることになったよ。
護廷十三隊じゃなくて、これからは護廷十一隊と呼ばれるようになるはずだ」
「・・・え？」
雛森の目が、わずかに見開かれた。
「もう、いいんだ。君も、日番谷隊長も、松本さんも。皆、解放されたんだよ」

眠りについて、一ヶ月。
日番谷と乱菊は、どれほど四番隊が手を尽くしても、全く目覚める兆しは無い。
つながれた点滴だけで命をつないでいる、植物状態が続いていた。
――　仕方ないのじゃ。
苦渋の選択を下した山本総隊長は、居並ぶ隊長・副隊長の前で、頭を垂れた。

――　今は戦時中じゃ。
いつ目覚めるかも知れぬ者達を、これ以上隊長格に据えることは・・・状況が赦さぬ。

破面が、今この瞬間に攻めてきてもおかしくない状況なのだ。
一分の隙もなく守りを固めねばならぬこの時に、隊長不在の隊を放置することは出来ない。
そう理由を述べた山本総隊長の表情が、他の誰よりも沈痛なものだったから・・・
誰も、それに反対をすることはできなかった。
そして、同時に出された五番隊の解体にも、異論は一切出なかったのだ。
その理由は・・・今の雛森を見れば、一目瞭然だった。

吉良が雛森の肩を掴んだ手に、力を込めた時だった。
バシッ！！
音を立てて、雛森が吉良の手を、振り払った。

「何・・・言ってるのよ」
雛森は反射的に立ち上がり、吉良と対峙した。
そして、眠り続ける日番谷を見下ろす。
「ちょっとずつ良くなってるのよ？体だって温かいし、いつかはきっと――」
「雛森君・・・！」
吉良は、卯ノ花から聞いて知っている。
「良くなっている」兆しなど、どこにもないと。
吉良が無言で首を振ると、雛森の目が泣きそうに歪む。

「・・・てよ・・・」
かすれた声が、雛森の口から漏れた。
「え？」
吉良が聞き返そうとしたとき、雛森は発作的に日番谷のベッドの上に覆いかぶさった。
「起きて！起きてよ！！ねぇ、本当はもう起きてるんでしょ！？日番谷くんっ！！」
「やめるんだ！！」
日番谷の肩を両手で掴み、乱暴に揺り動かした雛森を、吉良は必死になって止めた。

「ダメだ、点滴が抜ける！！」
上半身が浮き上がるほどに強く揺さぶられても、日番谷の表情は変わらない。
本物の・・・死体のように。

「どうしました！」
騒動に気づいた看護婦が、部屋に駆け込むと・・・二人を見て、短い悲鳴を上げる。
「ち・・・鎮静剤を！早く！！」
気が違ったように振り解こうともがく雛森を押さえ、吉良は必死で叫んだ。
「嫌！嫌なの！助けて・・・誰か助けて！日番谷君・・・！！」
注射を打たれる間も、雛森の叫びが鼓膜を打つ。
ぐっ、と吉良が拳を握り締めた。

「日番谷隊長は、もうここには居ないんだッ！」
気づけば、叫んでいた。

しーん、とその場が静まり返る。
見下ろすと、瘧(おこり)にかかったかのように、震える雛森の体があった。

「あたしが・・・悪かったの」
「雛森君！しっかりしてくれ・・・」
祈るような気持ちで、吉良は雛森の肩を掴んだ。
「あたしが悪いの。日番谷君に刀を向けたから・・・あたしが傷つけたの！
ねぇ、あたしはどうやったら償えるの？どうしたらいいの？教えてよ・・・」

吉良の両腕を握った雛森の手から、力が抜けてゆく。
「お願い。せめてあたしに・・・謝らせて」
やがて、その体からぐったりと、力が抜けた。

「・・・吉良副隊長」
看護婦が、雛森を抱き上げた吉良を見て、声を上げる。
吉良は無言で、日番谷の隣に雛森を横たえると、乱れた布団をふたりの上にかけてやった。
「どうか・・・夢でくらい、日番谷隊長に会えるように」
やつれた二人の顔を見下ろし、吉良はつぶやいた。

――　雛森君。君は・・・
助けてくれと、日番谷の名を呼んだ声が、生々しく鼓膜によみがえった。
藍染ではなく、吉良でもなく、日番谷を呼ぶのか。
何のことはない。それが「全て」ではないか。

吉良は空ろに、わらった。

藍染を失っても、まだ正気を保てた雛森。五番隊を率いることができた雛森。

しかし・・・日番谷を失って、彼女の土台は崩れ落ちた。

副隊長としての業務はもちろんのこと、自分自身のすべてを、彼女は放棄したのだ。

一日中、この病室で日番谷の隣に座り続ける雛森を、誰もどうすることもできなかった。

看護婦が出て行っても、吉良はその場から動けずに居た。

目の前には、眠り続ける日番谷と雛森。

振り返っても、瞼を閉ざしたままの乱菊がいる。

すぅ、すぅ。

眠り続ける三人分の寝息が、引きあう。すぅすぅ。

それ以外の音は、何も聞こえない。すぅすぅすぅ。

「あ・・・」

すぅすぅすぅすぅ。

「止めてくれ・・・」

吉良は両手を耳元にやると、かきむしった。

――　狂ってしまう。狂ってしまうよ・・・

「あぁぁぁ！！」

寝息が聞こえないよう声をあげ、血走った目を外に向けた、その時だった。

吉良は、見るはずの無い景色を見た。

― kurui（二） ―

窓から見える、白一色の景色。
その中に、一人の少女が立っていた。
雪降りしきる中だというのに、薄く蒼いドレスを身にまとっている。
ネグリジェにも似たそのドレスの胸下には、同じく蒼い幅広のリボンを巻きつけている。
それを見た瞬間、吉良は一瞬、自分が本当に狂ってしまったのかと思った。

それほど・・・少女の姿は、どこか「異質」だった。
風が吹いているのに、その黒髪はそよとも揺れない。
少女の頭に舞い降りた、雪が。その少女の体を「すり抜け」、地面に落ちた。

「！！君は・・・！」
蒼く大きな瞳が、まっすぐに吉良のほうを見つめている。
吉良と目が合うと、少女はふっと身を翻（ひるがえ）した。

「待ってくれ！！」
吉良は、気がつけば必死で叫んでいた。
そのまま窓枠を蹴り、外へと飛び出す。

「き・・・吉良副隊長？」
いきなり3階の窓から飛び降りてきた吉良に、周りの死神がぎょっとして声を上げた。
「今！子供を見なかったか！黒髪で、蒼い服を着た・・・」
しかし吉良に、死神たちの顔色を見ている余裕は無い。

めまぐるしく辺りを見回した吉良は、通りの向こうに走ってゆく少女の影を見た。
さっきの少女ではない。白い短い髪。しかし、翠(みどり)のドレスの形は良く似ている。
その足は・・・雪の上に、足跡を残していない。
「待て・・・！」
吉良は死神たちを突きのけ、駆け出した。

「・・・おい。吉良副隊長が今言った子供なんか、いたか・・？」
「いや、何も俺には・・・」
残された死神たちは首を振り合い、幽霊でも見たかのように、吉良の背中に目をやった。

渡(ワタリ)。
死神ですら把握できない一族。
現実からユメに逃げ込みたいと思う者しか、見ることが出来ないという一族。

今の自分なら見る資格はある、と吉良は息を切らせ、走りながら思った。
危険だ、などとは考える余裕もなかった。
雛森を救いたいのだ。
そのためには、日番谷を夢から連れ戻さなければならない。
そして日番谷が自力で目覚められぬなら・・・彼を眠りへ誘った者に頼むしかない。

「待ってくれ！頼む！」
走っても走っても、自分の半分の背丈もない少女との距離は縮まらない。
ただ、角を曲がるたび、ちらり、とどちらかの少女の着物や、髪が垣間見えた。
まるで・・・誘っているように。

どれくらい走ったのか、もう判らなかった。
雪まみれのまま、吉良は立ち止まる。
袋小路の先に・・・少女が二人、並んで立っていた。
長い黒髪、短い白髪。蒼い瞳、翠の瞳。
色彩は似ていないが、その顔かたちは、双子のようによく似ている。
そして、二人の足元は雪に沈んでおらず、わずかに差し込んだ日の光も、二人の下に影をつくってはいなかった。

「日番谷隊長と松本さんを夢に連れ込んだのは、君たちなのか！」
「そうだよ」
返したのは切香（キリカ）。
食って掛からんばかりの吉良の剣幕にも全く怯えることなく、ただ立っている。
「なんてことをしたんだ、君たちは！」
「どうして？二人とも、幸せそうなのに」
空子（カラコ）が、全く吉良の言っていることが判らない、という声音で、軽く首を振った。

吉良は、大股で二人に歩み寄った。
「そんな訳ない・・・あの二人に限って、そんなことは有り得ない！どうしたら二人は目覚めるんだ！」

「カンタンだよ」
切香はこともなげに言った。
「ユメを見てる人が、目を覚ましたいと心から望めばいいんだよ」
「そんなことなら、あの二人はもう、とっくに思ってるはずだろう！」
吉良の問いに、切香は首を振る。

「あたしたちは、ユメにいたくないヒトを無理やり閉じ込めるようなことはしないよ」
「それは嘘だ！」
「二人に会ってみる？ユメの中で」
「できる・・・のか」
「えぇ」
「できるよ」

畳み掛けるように、切香と空子が交互に語りかける。
「行くさ」
即座に、吉良は答えた。
「無駄だと思うけど」
無機質な声で、空子がつぶやく。
そして吉良が気づいたときには、その姿は吉良の目の前にあった。
その数メートルあった距離をどうやって詰めたものか、吉良には全く見えなかった。

空子は無表情のまま、吉良の額に、トン、と軽く指を置いた。
途端。
吉良の意識がゆらり、と揺れた。
遠のく意識の中で、切香の声が切れ切れに届いた。
「君、頼りなさそうだから、ひとつヒントをあげる。

『ユメを見ていないヒト』を、探しなよ」

「吉良副隊長！どこですか！」
その通りに死神たちの声が響いたのは、それから約5分後のことだった。
「ねぇちょっと、どうしたのよ？」
「いや、吉良副隊長が、訳のわからないこと言って走っていったから。もしかして、また・・・」
「縁起の悪いこと言わないでよ！」
声が、近づいてくる。

「確か、こっちに・・・」
複数の足音が、袋小路に響き渡った。
「なんだ、行き止まりじゃ・・・」
「きゃぁぁぁ！！」
ため息をついた死神の後ろに、悲鳴が重なった。
降り積もる雪に、半ばうずもれるように倒れていたのは・・・
「吉良副隊長っ！！」
鈍色（にびいろ）の空に、叫びが吸い込まれた。

現の踏み絵（一）

「いっ、おいっ！！」
誰かが、吉良の肩をゆすっている。
痛いほどの力だ。

――　誰だ・・・
意識が急浮上する。
吉良は、ゆっくりと薄目を開け・・・自分が、雪の中に倒れていることに気づいた。
――　そうか。僕は、二人の不思議な女の子に会って・・・

「吉良！」

ハッ、と吉良は目を見開いた。
ガバッ、とその場から身を起こす。
慌てて周りを見回すが・・・さきほどと変わらない袋小路が見て取れ、吉良はため息をついた。
――　日番谷隊長や松本さんがいる世界には、行けなかったか・・・

「おい！」
いきなり背後から頭を叩かれ、吉良は前につんのめった。
「あ、阿散井くん」
そこには、長い赤髪を後ろで束ね、ゴーグルを額にかけた男・・・
阿散井恋次が居た。
「阿散井くんじゃねーよ。
急にこんなトコで倒れて寝てたり、急に起き上がったり、ため息つ

いたりしてよ。一体おめ・・・」
一気にそこまで言った恋次が、吉良の顔を覗き込むなり、言葉を途切らせる。

「お、おい、おめー大丈夫かよ？すげーなんか顔色悪いぞ？」
「だい・・・じょうぶだ」
なんだか眩暈がする。それをこらえ、吉良は立ち上がった。
しかし、その後に聞こえてきた声に・・・吉良の心臓が跳ね上がる。

「おーい阿散井クン、イヅルおったやろ？」
この声。
この独特なイントネーション。
聞き間違える、はずがない。

――　そんな、馬鹿な・・・

袋小路の向こうから現れた銀髪の男は、吉良を見て肩をすくめた。
「君、三番隊副隊長の吉良イヅル君やろ？
変なトコで霊圧感じたから、阿散井クンに頼んで探してもろたんや」

「い・・・市丸隊長っ！！なんでこんな所に！？」

「は・・・はぃ？」
吉良の剣幕に、市丸がたじろぐ。
慌てた恋次が、吉良の肩を掴んで引き戻した。
「それはコッチのセリフだぜ。お前こそこんなトコに何の用だ！
大体お前、市丸隊長と話してるの見たことねーのに。仲良かったっ

け」
「ぜーんぜん。口聞いたことも初めてやで」
・・・なんだ、この齟齬(そご)は。
市丸の言葉に、初めて吉良は我に返る。
当たり前のように、不自然なストーリーが進行してゆく。
これは・・・
夢、だ。
吉良はそのことに思い至り、改めて辺りを見回した。
――　二人に会ってみる？
少女のうち、白髪の一人が言葉を思い出す。
と、すると。彼女たちは約束を守ったのか。

「大丈夫かよ、本当におめーはよ」
恋次が、吉良の死覇装をぽんぽんと叩き、雪を払い落とした。
夢でも変わらぬ、そのぶっきらぼうだが友人思いな恋次が、なんだか懐かしかった。
「熱燗(あつかん)でも飲むか？冷え切った体しやがって。
京楽隊長や乱菊さんと、今から飲みに行くんだ。お前も来いよ」
「ら・・・乱菊さん？」
「ん？あぁ。乱菊さんがいるのはいっつものことだろ。どーかしたか？」
「い・・・いや。僕も行くよ」
吉良は動揺を押し隠し、頷いた。
ここが日番谷と乱菊が暮らしている「ユメ」だというなら。

乱菊が「現実」の世界のように、眠りについていないのは当然だろう。
――　会って話せる・・・のか。
少女達の言葉によると、今の二人は「ユメから目覚めることを望んでいない」のかもしれない。
しかし、吉良は日番谷と乱菊を信じていた。
あの二人が、現実を見限り、ユメに留まるなどありえないと。

「それじゃ、決まりやな。行くか」
市丸がくるりと背を向けた時・・・吉良は、再び眩暈を感じた。
その背中に刻まれた数字は、見慣れた「三」ではなかった。
「十」。それなら、日番谷はどうなっているのだ？
「あの・・・日番谷、隊長は？」
「ヒツガヤ？誰だ、それ？」
「・・・。いや・・・なんでも、ない」
「・・・本当に大丈夫かよ、お前？」
恋次が、今度こそ心配そうに覗き込んでくるのを見て、慌てて吉良は首を振った。

「心配性やなぁ、阿散井クンは。
ちょーっと寝ぼけて、お頭(つむ)がイッてしもとるだけやろ」
「そりゃ、言いすぎですよ市丸隊長！」
ハハハ、と市丸が暢気(のんき)に笑う声が聞こえた。
恋次が市丸に何かを返し、自分も同じように笑い出す。

――　平和だ・・・
通りを歩きながら、吉良は思わずにはいられなかった。

同じように雪が積もった精霊廷でも、現実と夢の世界では、全く人々の活気が違うのだ。
貴族の子供達が雪合戦をしているのか、歓声があちこちから響いてくる。
行きかう死神たちの声も大きく、笑い声が至る所で聞こえる。
現実の世界がどれほど沈鬱な空気に沈んでいるか、ここに来て吉良にはよくわかった。

「ちーす！遅くなりましたー！！」
飲み屋の暖簾（のれん）をくぐり、恋次が大声を出した。
その後ろから市丸が、一番最後に吉良が続く。

「おーう。悪いねー、もう出来上がっちゃってるよ！」
返したのは、京楽。その向こうに、浮竹や檜佐木の姿も見える。
そして、一番奥にいた人物は・・・吉良たちのほうを見るが早いか、満面の笑みを浮かべた。
「来たわね！！」
酒に頬を赤らめ、酔っ払っているのが一目で分かる千鳥足で現れたのは・・・

「乱菊さん！」
「ギン！」
乱菊はあっさり吉良を無視すると、その前に居た市丸の胸に、どん、とぶつかった。
「おーおー、できあがっとんなぁ。ボクの胸で酔うたらえぇ」
「ひゅー、相変わらず熱いねぇ、お二人さん」
京楽が冷やかす。
「当たり前や！ボクら、いっつもラブラブや」
唖然として状況を見つめる吉良に気づくことなく、乱菊は市丸の腕

を取ると、ぐいぐいと奥へ引っ張った。

「まぁ、あの二人はしょーがねぇよ。
隊長副隊長の仲でそれはねーだろっていう輩(やから)もいるけどよ」
恋次が、吉良の隣で肩をすくめた。
「ソウル・ソサエティも、ここ百年以上ずっと平和なんだ。
別に目くじら立てなくてもいいだろ」

ずっと、平和、か。
吉良は、改めて、宴席を見渡す。
皆・・・幸せそうに、笑っている。
戦争の影に怯える、現実の世界とは大違いだ。
この世界に居られるならずっといたいと、僕でも思うくらいだ・・・
注がれた杯を、一気に飲み干す。
夢の中だと判っているのに、ほんのりと酔ってくるから不思議だ。
夢か現(うつつ)か。その境目が、酔った目に滲んで見えた。

現の踏み絵（二）

日番谷、雛森の二人の名前は、死神の中には存在しない。
十番隊の隊長は市丸、副隊長は乱菊である。
そして、吉良は三番隊副隊長で、市丸とはほぼ面識が無い。
今の状況について、それとなく話を聞いてみて判ったのは、それだけだった。

「こないだ、占いに行ってきたのよ！ギンと私で」
向かいでは、乱菊が大きな身振り手振りを交えて、大声で話しているのが聞こえる。
吉良が見る限り、夢の世界にすっかり溶け込んでいるように見える。
二人で話せればいいが、この調子だとそれは望めなさそうだった。

――　イチか、バチか・・・
「あ、あの！」
急に大声を出した吉良に、皆の視線が集中し、吉良はたじろいだ。
だが・・・現実の世界でやつれ果てている雛森のことを考えれば、退いている場合じゃない。

「占いって言えば、夢でも占いはできるみたいですね。僕、この間松本さんの夢見ましたよ」
一瞬きょとんとした乱菊だったが、興が乗ったのか、吉良のほうへ身を乗り出してきた。
「いいじゃない、あたしそういうの好きよ！言ってみて、吉良！」
「ええ」
吉良は頷いた。
「松本さんの上官が、市丸隊長じゃないんです。

同じように銀髪なんですが、蒼い目をした少年なんです。そして」
その少年の名は。
そう続けようとした時、カシャン、と音が響いた。

「おーおー乱菊、何してるんや！」
「きゃー！こぼしちゃった！」
乱菊の手から零れ落ちた杯が、彼女の死覇装に黒い染みを作ってゆく。
「手ぬぐい！手ぬぐい！」
市丸が慣れた手つきで、乱菊の膝をぬぐった。

「酒臭なってしもて・・・嬉しいやろ。服からも大好きな酒の匂いするで」
「それはいらないわよ！」
乱菊はウンザリ、とした声音で返した。
しかし、吉良ははっきりと見たのだ。
「碧い目をした少年」のところで、乱菊の表情が強張ったのを。

「松本さん・・・！」
しかし、身を乗り出した吉良の前で、乱菊は手を振った。
「ちょっと、外で着物拭ってくるわ」
そう言って背を向けた乱菊の背中を、吉良は追った。

乱菊は、壁に目を向け、拒絶するように吉良から背を向けていた。
「・・・松本さん」
吉良が、静かに問いかける。
その後姿を一目見た瞬間に、もう判っていた。
間違いない。この「乱菊」は、幻なんかじゃない。

「皆が、待っています。・・・日番谷隊長は、どこにおられますか」
その問いに、乱菊はパッと首を返して振り向いた。
「隊長も・・・この世界にいるの？」
「貴女をこの世界に導いた、少女達の言葉を信じるなら」
「・・・そう」
驚愕の色に染められた乱菊の瞳が、見る見る間に苦悩の色に塗り変わってゆくのを見て、吉良は言葉を失った。

「あの少女達は僕に言いました。現実の世界に戻る方法は一つ。
『元の世界に戻りたい』と、心から願うことだと」
振り返った乱菊の表情は、悲壮なほどに青ざめていた。
まるで・・・「現実」という踏み絵を前にして、立ちすくむ信者のように。

「できないわ。そう・・・思えない」

吉良は、乱菊の唇が動くのを、見守ることしかできなかった。
「な・・・にを」
言いたい言葉がこみ上げてくる。しかし、何一つうまく言葉にならなかった。
「正気ですか？」
口を突いて出たのは、我ながら滑稽（こっけい）な一言だった。

「・・・」
乱菊は、つかの間感情を削がれた瞳を、吉良に返した。
「・・・ぷっ・・・あはははは！！」
すぐに、弾かれたように笑い出した。

しかし、それは心から楽しそうに笑っていたさっきまでとは、明らかに別物だった。
「正気か、ですって？正気なわけないじゃない！」
「乱菊・・・さん」

「分かる？いつもいつも、行き先も告げずに勝手にいなくなってるのに気づく気持ちが！
分かる？どれほど本気でぶつかっても、スルリと逃げられる気持ちが！分かる！？」
「乱菊・・・さん。貴女は、誰のことを」
嘘だ。
もう、その時には吉良はわかっていた。
でも、乱菊の目尻に浮かんだ涙を見ると、もう何も言葉を継げなかった。

「アンタに分かるの？そんな男に、面と向かってサヨナラを言われたあたしの気持ちが！」
笑っているのか、泣いているのか。
乱菊は自分でも、その時には分からなくなっていた。
滑稽（こっけい）な一人芝居、のはずだった。
でも、ただ一人の観客を得て・・・その芝居はあっけなく幕を閉じてしまった。

「・・・ッ」
気づけば、笑いは尽き果てていた。
乱菊は息を整え、頬を流れる冷たい涙をぬぐった。
どれほどの時が流れただろう。

三十秒ほどに思えるが、五分も経ったようにも思える。
乱菊は、ふっ、と顔を上げた。
「・・・吉良？」
そこには、闇が広がるばかり。
吉良の姿は、もうどこにもなかった。

「おい、吉良！今度はどこ行くんだよ！」
「便所だよ・・・」
酔いを醒ますためか、玄関口で座り込んでいた恋次におざなりに返すと、吉良は駆け出した。

――　日番谷隊長に会わなければ・・・
死神になっていないとすれば、思い当たる日番谷の居場所はひとつしかない。
流魂街第一番区、「潤林安」。
日番谷が幼少期を過ごした場所である。

学生時代、雛森に誘われて、何度か家を訪れたことがあったから、場所の見当はついていた。
もっとも、現実の知識が、どこまで通用するのかは全く心もとなかったけれど。
しかし、乱菊の助力が仰げないなら仕方が無い。

――　「さよなら」とはっきり言われた、か・・・
吉良は、乱菊が涙を流すところを、初めて見た。

現実の乱菊に比べて、明らかに繊細で、剥き出しだった彼女。
自分の願望が露にされる世界におかれた、より源に近い存在といえるのかもしれない。
しかし、その魂は、きっと同じだ。

――　忘れろなんて、言わないわよ。
あんた、そんな器用なタイプじゃないでしょ？
吹っ切れるまで悩んでもいいのよ。
時がきっと、解決してくれるから。

あの時の乱菊の言葉が、あれほど吉良を癒したのは。
きっとそれが彼女自身から出た、本当の言葉だったからだ。
「忘れられないのも、不器用なのも・・・貴女じゃないですか」
吉良はぽつん、とつぶやいた。
しかし、そんな乱菊の弱さを、責める気にはなれなかった。

現の踏み絵（三）

吉良は、目指す家の前に立ち、ひとつ息をついた。
家というより、半ば小屋のような、粗末な造りである。
真央霊術院時代、雛森に連れられて何度も来た家と、全く変わりない佇まいがそこにはあった。

引き戸の隙間からは、煌々と明るい光が漏れてきている。
窓からは、煮炊きをしているのか、水蒸気が白く立ち上り、闇へと解けてゆく。
幼い頃の憧憬を見るように、吉良はしばらくそれを見つめたままでいた。
そして、祈るような気持ちで、小さな引き戸をノックした。

「はいはーい！」
吉良の気持ちとは裏腹に、屈託のない明るい声が、家の中から響く。
たたた、と小さな足音が家の中に響き・・・ビクリ、と吉良は肩を動かした。

「どちら様ですか？」
白い小さな手が引き戸を掴んで、ガタガタと引き開ける。
明るい小屋の中から、あどけない少女の顔が覗き・・・吉良を見て、にっこりと笑った。
「こんばんは」
「ひな・・・もり、君」
それこそ、夢にまで見た、以前の雛森の姿がそこにはあった。
「・・・あたしを知ってるんですか？死神さん、ですよね？」

その大きな瞳に見つめられ、吉良の心臓が大きく跳ね上がる。
幻だと己に言い聞かせても、心の動揺は全く収まってくれなかった。
雛森は、不思議そうな顔をしながらも、笑顔を消さずに吉良を見返している。
「あ！あの・・・」
何かしゃべらなければ。
自分でも滑稽なほど上ずった声を出してみたものの、次の言葉が浮かんでこない。

そのとき。
「あれ？シロちゃん。遅かったね」
不意に雛森が、視線を動かした。
「シ・・・」
シロちゃん？吉良が考えるよりも早く。
吉良の背後で、聞き間違えようの無い声が響いた。
「ちょっと散歩してたんだよ」

慌てて振り返った吉良の背後に居たのは、銀髪の少年。
いつも逆立てていた髪は、すんなりと額にかかっている。
表情も、「日番谷隊長」と比べれば、格段に幼く見える。
しかし、それは紛れも無く・・・「日番谷冬獅郎」だった。

「ねぇ、ちょっとシロちゃん！」
「寒いから中入ってろ。・・・俺は、吉良と話がある」
それだけ言うと、日番谷はさっさと吉良に背を向け、歩き出した。

吉良は、足早に日番谷の後を追った。
――　吉良。
さっき、日番谷ははっきりと、吉良の名を呼んだ。
吉良が誰なのか。何をしに来たのか分かっている。そんな断固とした声音だった。
「何を泣きそうな顔してる。副隊長のくせに、だらしねえな」
ひょい、と振り返った日番谷が言い放った何気ない言葉。
その言葉の強さが、張り詰めていた吉良の何かを解きほぐした。
誰もが迷い、揺らいでいた「現実」の精霊廷の中で。
吉良が待っていたのはこんな風に、強く迷いの無い誰かの言葉だった。

闇に沈んだ通りは、人通りは全くない。
粗末な家々から漏れる光は、薄ぼんやりとしか二人の姿を、互いの視界に映し出さない。
「・・・日番谷隊長」
「何だ」
現世では瞼に閉ざされていた翡翠の瞳が、まっすぐに吉良を射た。
「・・・夢はもう、おしまいですよ」
そうだな、と。
彼が期待した言葉は、返ってこなかった。

「ここに居る松本は、『夢』じゃねえんだな」
柵に背中をもたせ掛け、日番谷は吉良を見上げた。
「えぇ。・・・気づかれていたんですか」
「まぁ、な」
乱菊も日番谷のことを聞いたとき、驚いた顔はしていたが、動揺を

収めるのも早かった。
やはり、直感というにもあまりにも鋭い感覚が、二人の間にはあるのかもしれない。
「貴方と乱菊さんは、ずっと四番隊舎で眠り続けています。
雛森君は・・・目覚めない貴方の傍で、一日中泣いていますよ」

ふっ、と。
その深い蒼の瞳が、曇る。
「でも。アイツが求めてるのは、俺じゃないから」
「な、にを・・・」
吉良は、思わず拳を握り締め、日番谷のほうに大きく一歩、踏み出した。

何を・・・何を、言っているのだ。
あれほど近くにい続けて。
なぜ今雛森が泣いているかも、分からないのか。
「違う・・・違う！雛森君が求めてるのは・・・！」
そこまで言って、吉良は言葉を詰まらせた。
そこから先を言うのは、躊躇(ためら)われた。

「・・・こっちの世界の雛森も、泣いてる」
吉良が黙り込んだ、その空白を埋めるように、ポツリと日番谷が言った。
「俺がどこかに行ってしまう夢を見るって。行かないでくれって」
「でもそれは幻にすぎない！」
「・・・本当に、そう思うか？」
「・・・え」
「この世界は美しい。そう思わないか？」
吉良は、虚を突かれたように黙り込んだ。

平和な世界。誰もが信頼しあう世界。確かに、それは美しいだろう。
でも・・・それは、この世界が乱菊と日番谷の「願い」が形になったものだからだ。

「この世界は・・・幻です」
吉良は、唇をかみ締めて、決心したように続けた。
「この世界は確かに美しい。でも、現実じゃない。
行かないでくれと泣く雛森君も、現実に戻りたくない、という貴方の願いの裏返しに過ぎない」

うつむいた日番谷の表情は、分からない。
だが、烈しく葛藤しているらしいのは、見て取れた。
「日番谷隊長！」
思わず、吉良は日番谷に歩み寄った。
そして、その小さな両肩を力任せに掴んだ。
「行かなければならないと、貴方は分かっているはずだ！」

「やめてっ！！」

日番谷と吉良の体が、弾けるように離れた。
その声の主が、二人の間に走りこみ、引き分けたからだ。

「シロちゃんに何するのよ！！」
サッ、と日番谷の前に入り込むと、躊躇いの無い目で吉良を睨み上げた。
「雛森・・・君」
吉良が、絶句する。
人一倍小柄で、人一倍優しげなのに。
誰かが傷つこうとすれば、烈しく敵に立ち向かう。
現実の吉良が知っているとおりの雛森が、そこにはいた。

「・・・どいてくれ」
「どかないわ」
これは、ただの幻。
そう思えば、無視することも、振り払うことだって出来るはずだ。
しかし、雛森を見下ろした吉良は、何も言えなくなる。
――　これが、本当に、幻なのか・・・？

「帰ってください」
雛森は、断固とした口調で、吉良に向かって言い放った。
「日番谷君は、あたしの大事な人です。どこへも連れて行かせない」
「・・・そうか・・・」
吉良は、ふらふらとした足取りで背後に下がった。
そして、雛森の後ろで、うなだれているように見える、日番谷を見やった。
「これが貴方の『望み』ですか」
日番谷は、痛みに耐えるように固まった。
それでも、何も言わなかった。そうだとも、違うとも。

もう、いたたまれなかった。
吉良は、庇いあう二人に背を向け、足音も立てずに静かに、その場から立ち去った。

夢の残り香（一）

暗くても、人の声や笑い声が絶えない、流魂街。
その中をただ一人、異質な空気をまといつかせた吉良が通り過ぎてゆく。
――　この世界が、すべて「幻」・・・
吹き抜ける風は冷たく、人々は幸せそうで、いつも通りの夜が訪れている。
吉良だって、ほんの半年前は、そんな毎日を送っていたのだ。
隊長だった市丸の裏切り。雛森の狂乱。
「現実」のほうが、よほど実感が薄いじゃないか。

――　このまま、皆に混ざってしまおうか。
気づけば、足は精霊廷の、あの居酒屋へと向かっていた。
何も無かったかのように皆と飲み交わし、笑いあい、悪夢のような現実を忘れてしまえれば。
自分も、日番谷や乱菊のように、幸せに暮らせるのかもしれない。

「ダメだ・・・！」

吉良は、その思いを頭から追い払う。
この瞬間にも、「現実」の雛森は、正気を失っているかもしれないのだ。
だが、日番谷と乱菊の二人が、目覚めるのを望まない今、吉良はたった一人だった。

――　「ユメを見ていないヒトを、探しなよ」

そのとき、不意に頭をよぎったのが、切香（キリカ）という少女のものだと気づくのに、しばらくかかった。

「夢を見ていない、だって・・・？」

それは、吉良、乱菊、日番谷。

確認するまでもなく、それは分かりきったことだった。

では、なぜわざわざ口にした？

「・・・まさか」

初めて、吉良はその可能性に突き当たった。

「おぉ、吉良おめー遅かったな！」

ハッ、と吉良は顔を上げ、玄関先に座ったままだった恋次の姿を見つけた。

いつの間にやら、門の前まで帰っていたらしい。

「どこの便所まで行ってたんだよ。

そういえば、あんまり遅いから、市丸隊長がお前を追うって言ってたぜ。

途中で会わなかったか？」

「え？追うって・・・」

「便所だろ？」

「え？あぁ、いや・・・」

便所とは言ったが、本当は流魂街に向かっていたのだから、何も答えようが無い。

――　会わなかったよ。

そう答えようとした吉良は、ピタリと固まった。

「待てよ・・・」
夢で初めて会ったとき、市丸は吉良をなんと呼んだ？

「・・・変だ」
不意に、吉良は顔を上げた。
それは・・・「有り得ない」のではないか。
「おーい、吉良？変なのはおめーだぞ」
「あ！阿散井くん！後は任せたよ」
「ハァ？おま、ちょっと、消えんな！」
乱菊のことが気になっていたが、仕方ない。
吉良は瞬歩でその場から姿を消した。

○　○　○

月はいよいよ冴え冴えと、屋根の上で足を投げ出した日番谷の上にも光を注ぐ。
この世界は美しい。
留まりたいと願うは願うほど、胸が痛いほど景色は輝きを増してくる。

「・・・ありがとう」

日番谷は、ぽつり、と呟いた。
何に対してかは、自分でもよく分からなかった。
深く刻まれた傷に気付かせ、そっと癒してくれた「何か」に対して

かもしれなかった。

心は、もう決まっていた。
日番谷は無言で立ち上がり、屋根から地面に飛び降りた。
「・・・日番谷くん」
その音に気付いたのだろう、引き戸を開けて、雛森が現れた。
「・・・雛森、俺は・・・」
「分かってる」
雛森の返事は短かった。
その感情を隠すには大きすぎる瞳は、日番谷の知らない感情に満たされているように見えた。

「行くんだね」
日番谷は無言で頷く。
――　ごめんな。
謝ろうとした言葉を喉の奥に押し込んで。
なぜなら、今から涙を止めに行こうとしているのは、彼女以外の誰でもないからだ。

「日番谷くんが決めたのなら、あたしには止められない。
次こそは護ってあげてね。あなたが本当に護りたいと思うヒトを」
「・・・あぁ」
――　日番谷くん。
そう、彼のことを呼ぶ雛森は、既にあの、あどけない笑みを湛えては居ない。
どこか影のある、「あの」雛森だ。
「・・・待っててくれ。今行く」

その大きな瞳がこぼれるように見開かれ・・・雛森はウン、と頷いて、微笑んだ。
そして、手を振ったように見えた・・・が、その姿がゆらり、と揺らめく。
瞬きするほどのわずかな間に、雛森の姿は、建物ごと掻き消えた。

――　当然、か・・・
日番谷が幼少期に過ごした家は、もうこの場所にはないのだから。
祖母は今頃ひとりでいるだろうし、雛森は嘆き悲しんでいる。
祖母も、雛森も、護りきるにはこの掌は小さすぎた。
でも・・・

「それが現実だ」

日番谷は、そう呟いた。
次こそは、護ってみせる。
そして、その場で黙祷するように目を閉じると、踵(きびす)を返した。

その時。
日番谷の頭上に、影が落ちた。

「!?吉良・・・?」
ばさり、と翻った死覇装に、日番谷がそばの樹上を見上げる。
太い枝の上に長身の死神の、闇よりも深い影が見えた。
その姿を見ると同時に、言い知れぬ悪寒が、背筋に走った。
「お前は・・・!」
闇に慣れた目で、その男の口元が亀裂のように「微笑み」を形作る

のが見えた。

「いちま・・・る」

「へぇ。やっぱり、判るんやね。ボクが」

凶悪な紅い瞳をのぞかせ、市丸は愉(たの)しげに言った。

「遊びましょ。『十番隊長さん』」

夢の残り香（二）

死覇装を纏った姿が、巨大な烏のように日番谷の前に降り立った。
「なんでてめぇがここにいる！」
「そりゃ、こっちの台詞やわ。ここにおるんは、ボクと乱菊だけの契約やのに・・・
渡(ワタリ)が、妙な茶目っ気出しおったか」
乱菊、の名前に、日番谷は一瞬だけ反応したが、すぐに冷静さを取り戻す。

「・・・やっぱり判ってたん？あの一瞬で」
流魂街の甘味処で出会った時のことを言っているのは、明らかだった。
「アイツが幸せそうやったから、何も言わんかったんか？・・・相変わらず、甘いお人や」

――　どうする？
市丸が少しずつ、間合いを詰めてくる。それでも日番谷は動かなかった。
市丸の武器は、伸縮自在な鎗。間合いなど無いに等しい。
その上、今の日番谷では、避けることもかなわないだろう。
背中に、イヤな汗が伝った。

「・・・なんで、俺のことに気づいた？」
「イヅルや。あの子、確実に現実のことを知ってた。
乱菊と話した後、すぐに出て行ったさかい、気になって後追ったら・・・ビンゴや」
ちっ、と日番谷は舌打ちした。

吉良はとにかく、同じ隊長格同士で気配にも気づかないとは・・・
本当に、自分はただの子供に成り下がっているらしい。

「でも、アンタも『良かった』やろ？ここに来て」
市丸の笑みが、残忍さを少しずつ、剥き出しにしてゆく。
「ここに居たい、て思ったやろ。現実なんかどうだってええって、思ったんちゃうんか」
無造作に、市丸は斬魂刀を腰から引き抜いた。
神鎗の白い刀身が露になり、日番谷の全身がハッと緊張する。

「ボクやって、心が痛むんやで。今の日番谷はんみたいな、ただの子供をいたぶるんは」
「ぬかせ、変態狐。一等好きなシチュエーションだろ？違うか」
日番谷が、そういい終わった瞬間。
市丸の懐が、キラッと一瞬閃光が走ったように見えた。

「っ？」
それに気づいた時には、すでにその切っ先が日番谷の頬を抉っていた。
「口の利き方を知らん子やな。ちーと、お仕置きが必要やな」
「・・・」
頬を流れ、唇を伝った血を、日番谷はペッ、と地面に吐き捨てた。

逃げても無駄。抵抗しようが、
この男の前には何も通用しないだろう。
ならば尚更、この男の前で無様な真似は見せたくなかった。
市丸は、そんな日番谷を、上から下まで嘗(な)め回すように見た。

「なぁ。どうしたら壊れるんや？どうしたら狂う？
その両手両足斬りおとしたらいいんか？それとも・・・」
愉しそうに続けた。
「同じこと、雛森ちゃんにしたら、いいんかな？」
「てめ・・・」
どくん、と胸が高鳴った。
均衡が、崩れる。
日番谷がなりふり構わず、市丸に向かって突っ込んだからだ。

「『一本目』」
市丸の口角が上がる。
その神鎗の一撃が、まっすぐに日番谷の右腕を狙った。

闇の中に、衝撃音が響き渡る。

「・・・？」
日番谷の頬に、熱い液体が飛ぶ。
そっと目を開けると、襲ってくるはずだった痛みは、どこにもなかった。
頬を拳でぬぐうと、自分のものでない血がべっとりとこびりついている。

カラン。

理解が及ばないまま、音を立て地面に転がったものに視線を走らせる。
これは・・・刀の鞘だ。

「やってくれんなァ」
市丸の声が至近距離で聞こえ、我に返った日番谷はその場から飛び下がった。
――　なに？
視線の先に捉えたのは、市丸の白い肌を流れ落ちる、血。
神鎗を握る右手の皮膚が裂け、血が滲んでいた。
痛みも感じていないような、爬虫類を思わせる笑みを浮かべ、市丸が顔を上げた。
「ただ、甘いなァ。鞘やなくて刀投げつけとったら、右手くらい持ってけたかもしれんで？」

「・・・それこそ、甘いです」
跳び下がった日番谷の背中が、背後に立つ死神の胸に打ち当たった。
日番谷は顔を上げ、声の主を見とめる。
「お前・・・」
「仮に右手一本失ったところで、貴方と僕の力の差は覆りません。刀を手放す真似はできませんよ・・・『市丸隊長』」
「！吉良・・・！」

日番谷の横を通り過ぎようとした吉良の前に、日番谷がとっさに腕を出した。
副隊長の吉良は、どうあがいても市丸には勝てない。
それは、今の日番谷が市丸に勝てないのと同じくらいの、厳然たる事実。
しかし吉良は、微かに微笑むと、日番谷の腕に手をやって下に降ろさせた。

「すみません。日番谷隊長」

「・・・え？」
「僕はずっと、勘違いしてたんです。僕だけが弱くて、他の皆は強いのだと。
だから誰かが救ってくれるのを、僕はただ黙って待っていた」
日番谷や、乱菊の言葉を聞き、この人達は強いのだと、「勘違い」していた。
でも、今の傷ついた二人を見て、吉良は思い知ったのだ。
自分たちよりも脆かった吉良の支えとなるために、二人は自らの傷を押し隠しただけだと。
自分は何もわかっちゃいなかった。
もう一度、吉良は思う。

「なんで判ったんや？イヅル。ボクが『ユメを見ていない側の人間』やと」
「それですよ」
吉良は、刀を下げたまま、市丸のほうへゆっくりと歩み寄った。
「貴方は、僕を『イヅル』と呼んだ。
この世界では、貴方と僕の接点は皆無に等しいのに、です。
他人に関心がない貴方が、この状況で僕をそう呼ぶことは、ありえないんですよ」

吉良が副官になった時も、苗字を覚えるだけで数ヶ月かかったのだ。
名前で読んでくれるまでには、更に数年の年月を要した。
吉良と同時にそのことを思い出したのか、市丸が懐かしげに笑い出す。
その笑みが・・・精霊廷にいたころと全く同じで、吉良は表情をゆがめた。

「この夢で暮らしたらよいのに。現実はちょっとばかり、今のイヅルにはきついやろ？」
裏切ったのは自分なのに。飄々とした口調で、市丸は吉良を見下ろす。
「夢・・・ですか。昔、夢なら見ていましたよ」
吉良の淡々とした口調から、感情は読み取れない。
「貴方の下で一生懸命働いて、貴方に認められ、共に戦う未来を」
強烈なほどに憧れていたのだ、目の前のこの男に。
ぐっ、と腕に力を込め、斬魂刀の切っ先を市丸に向ける。
「僕はもう、夢は見ません」

夢の残り香（三）

「夢は見ません、か」

その言葉を引き継いだのは、思いがけぬ声だった。
市丸の細い瞳が、わずかに見開かれ・・・後ろを振り向いた。
それは、ほんの一瞬の隙。
しかし吉良は、そのコンマ数秒を見逃さなかった。

「！」

思わず、日番谷が身を乗り出す。
吉良の刀は、市丸の喉元に突きつけられ、止まっていた。
ゴクリ、と生唾を飲み込んだのは、吉良の方だった。
切っ先が白い皮膚を突き刺すほどの距離にいても、市丸はどこか余裕を感じさせる表情のままだ。

「松、本」

日番谷の、掠れた声が静かな空間に響いた。
吉良は、市丸の肩越しに、こちらへと歩いてくる人影を見やった。
ふわり、と小麦色の柔らかな髪が、闇に解けた。
碧い猫のような瞳が、市丸の肩越しに、吉良を見つめていた。

「松本さん・・・」

市丸は、首だけ後ろにひねり、乱菊を振り返った状態で動きを止めていた。
――　どうする？

吉良の迷いが、日番谷には手に取るように判った。
乱菊の実力は、吉良に勝るとも劣らない。
既に一度戦い、乱菊が勝利していたことからも、それは明らかだ。
乱菊が市丸につけば、吉良にはどう考えても勝ち目がなくなる。

「乱菊」
市丸の背中に触れるくらいまで近く、乱菊が歩み寄る。
日本舞踊を学んでいるその歩法は、月光を浴びて見とれるほど美しい。
市丸を間近で見つめ、乱菊はゆっくりと顔に微笑みを広げた。

「夢は、覚めるものよ」

シャッ、と涼やかな鞘走りが響いたと思った瞬間、乱菊の刀が市丸の背に突きつけられた。
両側から刀を突きつけられ、市丸は一瞬表情を消したが、すぐに肩をすくめた。
「ヒドイなぁ。よってたかって苛めんでもええやん」
「油断するな！」
すかさず、日番谷が言葉を挟む。
普通なら絶対有利なはずのこの戦況も、相手が市丸なら・・・
あっさりひっくり返される余地は、まだ十分に有る。
乱菊はそんな日番谷を、どこか懐かしそうに見た。

「相変わらず心配性ですね、隊長」

「・・・！てめーが呑気すぎるんだよ」
日番谷が額に手をやって、吐き捨てるように言った。
「吉良に叱られて、思い出しちゃったじゃないですか」
乱菊は、湿り気の無い声で吉良を見やった。
「あたしが従い、護ると決めた人は貴方だけです。日番谷隊長」
日番谷は返事の代わりに、苦しげに眉根を寄せた。

――　こいつらを、こんなところで殺させちゃダメだ。
乱菊と吉良が本気で戦った所で、市丸は強いのだ。
そして、同等であるはずの日番谷自身が、今はほとんど無力だ。
現実ではありえないこの状況が、もどかしかった。

「ボクを斬るんか？乱菊」
鍵を握る男は、どこか愉しげに、背後の乱菊に声をかけた。
「アンタがホンモノなら、無理でしょうね」
乱菊の瞳が、細められる。
その無表情は、怒っているようにも、寂しそうにも見えた。

「でも、ギンはただの一度だってこんな風に、あたしを愛してはくれなかった。
アンタは『ギン』じゃない。幻なら遠慮なく斬れるわ」
「・・・待って、まつも・・・」
それは。それは、違う。
とっさに吉良が言葉を挟もうとした時。

「やっぱり甘いわ、イヅル」

至近距離で、市丸の声が鼓膜を打った。
――　しまった！！

そう思ったときには、もう遅かった。

「鏡門」

市丸の口から発されたのは、力ある言葉。

その鬼道の意味を考えるよりも早く、吉良と乱菊の体は、木の葉のようにその場から吹っ飛ばされた。

「ぐっ！！」

背後の木の幹に思い切り背中を打ちつけ、乱菊の体がくず折れる。

「まつ・・・もとさん！」

地面に叩きつけられたイヅルは起き上がろうとして、その場で咳き込んだ。

――　たかだか結界の一種で、こんな・・・

結界の壁を張った勢いで、副隊長二人を吹っ飛ばしたというのか。

精霊廷にいた頃よりも、更に力を上げているのではないか。

戦慄が、背中から駆け上ってくる。

「夢は、解けへんよ」

自由になった市丸が、悠々とした足取りで吉良のほうへと歩み寄った。

「迷ってる人間がいる限りな」

「迷っている・・・人間？」

吉良は聞き返したが、市丸は笑みを深めただけだった。

――　どうする？

日番谷は霊圧を失っている。

乱菊は意識が無いのか、ぐったりと木の根元に横たわったままだ。

「やるんか、イヅル」
市丸は、片眉をわずかに上げた。
それは、彼には珍しく、怪訝そうな表情に見えた。

吉良は、斬魂刀を構え、市丸を見据えた。
「もう、貴方と僕は敵同士ですから」
市丸の細い目から、紅い瞳がのぞく。
自分で言った言葉に傷つきながらも、市丸を見返す吉良を見やった。

「・・・そやな」
無表情の市丸が、どのようなことをその瞬間に思ったかは判らない。
しかし、次の瞬間、市丸が斬魂刀を吉良に向けたことが、
答えなのだろうと吉良は思った。
もう、戻れないのだ。
そしてこれはもう、「夢」なんかじゃない。

「！」
市丸と吉良が、弾けるように一点を見やった。
背後の暗がりから、足音が聞こえた。
それは、頼りないほどに小さく、ゆっくりとした足取りだった。

漆黒の沼から上がってきたかのように、黒い単、黒袴・・・死覇装。
月光下の銀髪は、闇の中で昼間よりも明るく、けぶるように輝いている。
右手に握り締められた抜き身の長刀に、鋭い光が渡った。

夢の残り香（四）

「日番谷隊長！」
涼しげな翡翠色の瞳が、迷いなく市丸に向けられた。
玲瓏（レイロウ）な霊圧が、周囲に広がってゆく。
押しも押されもせぬ、護廷十三隊の隊長がそこにはいた。

「悪かったな、吉良」
日番谷は、市丸を見据えたまま、吉良の横で立ち止まった。

「いつまでも迷い続けてたのは・・・俺だったみたいだ」

その表情は・・・こんなことを思うと不謹慎なのだろうが、吉良は思う。
まだ隊長へと戻りきれない日番谷の横顔は、親を失った、子供のようだった。

「まだ、本調子ではないみたいやね。そんな状態でボクに勝つ気なんか？」
「馬鹿だな、お前は」
市丸の言葉に、日番谷は冷静な口調で返した。
「俺たちの目的は、お前に勝つことじゃねーよ」
市丸が口を開くよりも早く、日番谷は動いた。
地面に向けた氷輪丸の切っ先で、静かに地面を突いたのだ。

「！」
パシャン。
響いたのは、水音。
氷輪丸が突いた点のような場所から、池に広がる水の綾のように、
幾重もの水輪が生まれ出た。

「うわ！」
吉良が思わず悲鳴を上げて、その場から飛びのいた。
水輪が足元に届いた瞬間、吉良の体が地面に沈んだのだ。

――　いや、地面というより、これはもう・・・
「水になっとるね。完璧に」
ふわり、と地面から中空に舞い上がり、市丸が下を見下ろした。

市丸の言うとおりだった。
それも、鏡のように波立たず底も見えない、巨大湖のような質量の水に。
それは、水輪が広がるにつれて、加速度的にどんどん流魂街に広がってゆく。
「吉良！松本を頼むぞ」
「はい！」
吉良は、地面にぐったりと横たわっていた乱菊を抱きかかえ、地面を蹴った。

――　すごい景色だ・・・
水輪の外輪は、まったくの無音で、瞬く間に拡大してゆく。
気づけば、潤林安と精霊廷をすっぽり飲み込むところまで広がって

いた。
家々が、そして巨大な精霊廷が、沈没する船のように水底に飲みこまれてゆく。
それは、ゾクゾクと肌が粟立つような光景だった。

「幻が、消える・・・」
すぐ隣で、日番谷はぽつりとつぶやいた。
「もう、大丈夫よ」
吉良の腕の中で、乱菊が身を起こした。
そして、ふわり、と中空に降りる。

「誰かが迎えに来てくれると思ってたけど、まさかアンタとはね」
頬を赤らめて乱菊を離した吉良を、どこかまぶしそうに見上げた。
「ちょっと見ない間に、いい顔になったじゃない。吉良」

「あーあー、台無しにしてもうて」
飄然とした声が響き、三人は声の方向を見やる。
「・・・市丸。まだやんのか」
三人から少し離れた空中に、市丸が浮いていた。
「やめとくわ」
日番谷がにらみつけると、市丸はあっさりと退いた。
「こんな夢の残り滓(カス)みたいなトコで戦っても、しまらへん」

既に周囲はもう、ソウル・ソサエティの片鱗も残していなかった。
あれほど眼下に広がっていた水すら、消えうせている。
ただ、闇とも光とも言いがたい、亡羊(ぼうよう)とした空間の中に四人はいた。

――　夢から覚めるのか・・・
すこしずつ、光の度数が高くなり、闇が薄れてゆく。
日番谷は辺りを見回した。

「・・・え」

沈黙を破ったのは、乱菊だった。
「どうして、アンタ・・・消えないの？」
乱菊が身を乗り出すと、市丸は、わずかに身を引いた。
乱菊が、唐突にハッ、と目を見開いた。

「アンタ・・・『幻』じゃ、ない・・・？」

その表情は、いつもと同じ真意の見えない微笑に覆い隠されている。
「ギン！！」
「いくな松本！！」
駆け寄ろうとした乱菊の袖を、日番谷が掴んだ。

「隊長！」
日番谷は市丸と乱菊を見比べ・・・はっきりと一度だけ、首を振った。
そっちに行ってはダメだ。
日番谷の意思が、その翡翠を通して流れ込む。

「・・・乱菊」

沈黙の中、口を開いたのは市丸だった。
「十番隊長さんと一緒におりな」
乱菊の表情が、見る見る間に苦悩に歪んでゆく。

「ギン・・・」

名を呼ぶことしかできない乱菊を見て、市丸は束の間、困ったような笑みを浮かべた。
そして、くるりと背を向ける。
その姿が、ふっ、と掻き消えた。

「き・・・消えた？」
日番谷が市丸の消えた方向に手を伸ばして、ぎょっとして手の甲を凝視した。
その手が、見る見る間に薄くなり、空間に透けてゆく。
「な・・・日番谷隊長っ！」
吉良が叫ぶその目の前で、日番谷の姿がふっ、と消えた。
「松本さ・・・」
叫んだ時には、すでに乱菊の姿は無い。
意識が、闇に落ち込んでいった。

――　どこだ、ここ・・・
ぼんやりとした光と闇の狭間に、日番谷はたたずんでいた。

「んー。結局４人もか。もしかして、ウチの赤字かな？」

聞き覚えのある声が、不意に聞こえた。
振り返ると、そこには、少し前に見かけた少女がいた。
白く短い、犬のようにふわふわとした髪をなびかせ、翠の目は穏やかに凪いでいる。
手にした、５センチ四方くらいの紙を見下ろしている。
数字と文字が書かれているらしい其れは、領収書のように見て取れなくもなかった。

少女は、日番谷の視線を感じると、ドキリとするほど真っ直ぐに見返してきた。
「ま、いいか」
その手から紙が離れ・・・闇にふうっ、と溶けた。

「あの子に愛されたい。それが、君の願いだったんだね」

今更、もう隠す気も起きなかった。
「分からねーよ。分かりたくもねぇ」
それだけ答えると、顔を背ける。

「これだけは、忘れないで」
切香の声が、姿が、どんどんと遠くなってゆく。
「ヒトは、かなわないユメは見ないものよ」

「えっ？」
日番谷は、ハッと目を見開いた。
「日番谷くんっ！！」

朦朧(もうろう)とした意識の中で、聞きなれた声が鼓膜を叩く。
何か温かいものが、頬にぽたりと落ちた。
一番初めに目に入ったのは、くしゃくしゃに顔をゆがめた、雛森の表情だった。

涙が一筋頬を流れ、床に零れ落ちるまで、わずか数秒の間に。
絶望に沈んでいた表情が、歓喜へと移り変わってゆく。
「日番谷く・・・あぁ・・・あああ！」
幼子を掻き抱く母親のように、なりふり構わず。
雛森は日番谷をぎゅっと抱きしめた。

「ちょ・・・待てよ！」
雛森の後ろに、立ち並ぶ大勢の死神を見とめた日番谷は焦った。
でも。
ガタガタと震える雛森の腕を感じ、日番谷は絶句した。
これほどまでにあけすけに、誰かに求められたのは初めてだったから。

日番谷はぎこちなく手を伸ばし、痩せてしまった雛森の背中を、ぽんと軽く叩いた。
歓喜が、震える雛森の体を通して、日番谷に流れ込んでくる。
――　なんだ。
胸に大きな穴を開けていたのは、雛森じゃなくて俺だったのか。
ふさがって初めて、日番谷はそれに気付いた。

「おー、吉良！おめー心配したんだぞ！！」

恋次の声に、日番谷はくらくらする体を起こし、そちらを見やる。
うなりながら上半身を起こした吉良と、目が合った。
涙にぬれる雛森に目を走らせ・・・ゆっくりと、微笑んだ。
「松本は？」
日番谷がハッとして見回した先。隣のベッドで、乱菊が眠っていた。
「う・・・ん」
小さく声を漏らすのを、心配そうに周りの死神が見下ろす。

「乱菊さん！」
涙を浮かべ、揺すろうとした伊勢を、日番谷が制した。
「少しだけ・・・もう少しだけ、待ってやってくれ」

― epilogue ―

伽藍（ガラン）
伽藍（ガラン）
鉦（かね）が鳴る音が聞こえる。

あぁ。市丸は、ひとり大きく息をついた。
また・・・ここに、戻ってきたか。

空も山も鳥も草も水も人も心も、
芯まで染め通るような、圧倒的な夕焼けの朱（あか）。
でも、市丸の心までは染められない。
「無」に色をつけることは、陽の光でも出来ない。

巨大な、伽藍堂。
鉦の音がいくら聞こえても、人の声が漣のように届いても。
市丸は、誰にも出会わない。
一度だけ・・・少女が訪ねてきたことがあるが、その記憶ももはや
朧だ。

きしきし。
音を立てて、廊下を歩む。
節くれだった柱に手を置き、鉦のある台座に目を向けた。

ふぅわり。

漂ってきた香りに、市丸は目を見開いた。
たんたん、と足音を立て、鉦の元に向かうと・・・
そこには、先客がいた。

「乱菊・・・お前なんで、ここへ」
まるで風景の一部のように自然に、乱菊がそこに居た。
紅い唇の口角が、ゆっくりと引き上げられる。
気まぐれな猫のようなその瞳は、今は穏やかな彩(いろ)に満たされている。
優しい表情のまま、乱菊はポン、と言葉を放り投げた。

「アンタとはもう、絶交よ」

投げられたボールを胸で受けるように、ギンはわずかにのけぞった。

「絶交、か。しゃーないな」

頭を掻く市丸の姿は、まるで悪戯(いたずら)を叱られた子供のようで。
乱菊は苦笑する。
そして、市丸にゆっくりと、歩み寄る。
「でも、これはただのユメだから。
ちょっとくらいの戯言(ざれごと)は赦されるわよね」

乱菊のぬくもりが、まるでパズルのピースを合わせるようにぴった

りと、市丸の胸に収まる。
艶めく唇が、市丸の耳の横で囁く。

「愛してるわ」

あたたかく、やわらかに息づく其れに、市丸が腕を伸ばしたのは、
おそらく無意識だったのだろう。
その右の手のひらが乱菊の背中に触れる、と思った刹那。
ふっ、と乱菊の姿は消え失せた。

柄にも無く慌てて、腕の中に視線を落とすが、
ただ・・・そこには、虚(うつろ)が広がるのみ。

「くっ・・・」
市丸の口から、乾ききった砂のような、笑みが漏れた。
くつくつと、発作のような笑いが次々とこみ上げる。
そして・・・右の手のひらで、目の辺りを強く強く、押さえつける。
圧倒的な夕日が、そんな市丸を照らし出している。
其れは、尽き果てぬ胡蝶の夢。

||

suite,

sweet

dreams

fin.

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7384e/

suite, sweet dreams

2010年10月10日14時29分発行